

タイトル 「千年水国」(せんねんみずのくに)

作者名 中澤日菜子

上演時間 一時間四十五分

内容 「水族館で働く八嶋渉はある日謎の少女と出会う。ことばを話せない少女は渉に懐き、渉は少女をじぶんの住むアパートへ連れてくる。賑やかな隣人たちと奇妙な共同生活を送る少女と渉。だがじつは水面下で少女を狙う、とある宗教団体があった。その名は『最後の箱舟』——いま、人類の進化をかけた壮大な物語の幕があがる！」

舞台上は、淡い光の射す、柔かな空間。

男が一人、掃除道具と古ぼけたラジオを持って現れる。

男、ラジオのスイッチを入れる。流れ出す音楽。男、音楽を聴きながら掃除を始める。

ここは、閉館後の、誰もいない水族館。

男がいったん去り、無人になった舞台に、少女が一人。

少女は「現れた」のではなく、もうずいぶんと前から其処に「在った」。

少女は眠っている。

女が一人、静かに現れる。

女、ラジオの局を変える。ニュースが流れてくる。

『…16日に静岡県松崎町の雲見海岸に迷い込んだ鯨の話題をお届けします。懸命の救出作戦の甲斐なく鯨は死亡しましたが、その後の解体作業中、妊娠中であつたと判明しました。奇跡的にも胎児が生きていたため、地元松崎町の漁業組合は東京の国立「海と光の水族館」に救援を依頼。駆けつけた水族館員の迅速な処置により、胎児は一命を取りとめ、現在は同水族館で順調に回復中とのことです。』

地元松崎町をはじめ、全国各地から「早く元気な鯨の赤ちゃんを見たい」という声が上がっていますが、捕鯨問題に敏感な欧米の一部マスコミでは「一刻も早く海に帰すべきだ」という声も聞かれ、同水族館の対応が注目されています。…それでは続いて世界のお天気です。ニューヨーク、晴れ。サンフランシスコ、晴れ。メキシコシティ、晴れ。リオデジャネイロ、晴れ。シドニー、晴れ。ジ

ヤカルタ、晴れ。シンガポール、晴れ。ハノイ、晴れ。北京、晴れ。モスクワ、晴れ。ロンドン、晴れ。パリ、晴れ。ベルリン、晴れ……』

延々と続く世界各地の天気予報。それらは、全て『晴れ』。

女 「世界は乾いている。もう何日も、雨は、降らない」

女、去る。

同時に、少女、目をあける。伸びをし、あたりをきよろきよろと物珍しそうに見渡す。

少女が動き出そうとすると、上手から下手に向けて女（三村佐都子）がすごい勢いで駆けて行く。思わず引っ込む少女。

佐都子 「榊原さーん」

少女、佐都子がいなくなったのを確認して、再び動き出そうとする。

と、今度は下手から、男（榊原浩二）を引っ張った佐都子が現れる。また隠れる少女。

榊原、カップラーメンを食べている。

佐都子 「早く早く早く！」

榊原 「ふおんあにいふおがんでも……」

佐都子 「だって動いたんですよ！ほんのちよびつとでしたけど、あたし見たんです、動いたんですよ、あの子！！」

榊原 「ふあかった、ふあかったから……」

榊原、足元にあるバケツにつまずく。バケツ、ひっくりかえり辺りに水がこぼれる。

榊原 「あちゃー」

佐都子 「いいですよ、そんなの……八嶋くーん！」

八嶋 「はーい」

上手上から応える声がする。最初に出てきた掃除夫（八嶋渉）である。  
八嶋、上手上で水槽を磨いている。

佐都子

「悪いけど、ここ、片付けておいて！」

八嶋

「はい」

佐都子、榊原を急き立てて去る。

少女、ようやく無人になった舞台に歩み出る。零れた水を触り、次にラジオに注意を向ける。何時の間にか天気予報は終わり、音楽がかかっている。少女、不思議そうにラジオを眺め、いくつかツマミをいじる。と、いきなり大音量に。吃驚する少女。飛び出してくる八嶋。

八嶋

「なんだなんだ！（慌ててラジオを消す）吃驚した、なんで急に…」

八嶋、ぶつぶついいながら零れた水の後始末を始める。

少女、そっと出てきて八嶋の様子を眺めている。八嶋が拭いた先から、また水を零す。

八嶋

「変だな…」

それでも気付かずに一生懸命拭いている八嶋。少女、面白がって今度はバケツに残った水を八嶋の頭からかける。吃驚仰天する八嶋。

八嶋

「うあああ！」

少女、大笑いしている。

八嶋

「き、君、いつからいたの!？」

少女、ニコニコしたまま。

八嶋 「もう閉館してるんだよ、早く帰らないと怒られるよ。大体今まで何処に隠れて…あー!!」

少女、八嶋の話を全く聞かず、八嶋の持っていた洗剤で遊び始める。

八嶋 「だ、駄目だって！返しなさい返しなさい、コラ！向けるな！こっちに向けるなって、こいつ…」

八嶋、ハツと思いが当たる。

八嶋 「きみ、ひよってして外国のヒト？日本語、わからない？あー…アージュジャツパニーズ？違う違う、英語で日本人かって聞いてど

うする…うー…キャンユースピークイングリッシュ？」

「キャ…キャ、ユー？」

「イエス！ユー、ユー」

「ユーユー」

「ユー、ユー！」

「(バケツを指しながら) ユー、ユー！」

「ノー、イッツ バケツ！」

「バケツ！」

「タワシ！」

「タワシ！」

「センザイ！」

「センザイ！」

「レイデイオ！」

「レイデイオ！」

「イエス！ソー フーアーユー？」

「バケツ！」

少女、ケラケラと笑う。

八嶋 「…困った…肝心なところがコミュニケーションできない…」

と、少女突然走り出し、袖に消える。

八嶋 「あ、コラ、そっちは駄目！」

少女を追って八嶋も去る。

舞台別の空間。

佐都子が肩を落として入ってくる。後から榊原。

榊原 「そんなにしょげるなよ」

佐都子 「うん…でもね本当よ、本当にあの子、動いたのよ」

榊原 「わかつてる。疑ってなんかいないよ」

佐都子 「頭を振って…そうして目が、開きそうになった…」

榊原 「…」

佐都子 「もう2週間になるのに…」

榊原 「…あっちの方は？何か変わったことがあった？」

佐都子、首を振る。

榊原 「そうか…」

この辺りから、八嶋、現れる。ようやく捕まえた少女を抑えながら、聞くともなしに聞いてしまう。

佐都子 「このまま…変化し続けたら…いったいどうなっちゃうんだろう…」

榊原 「…」

佐都子 「怖いんです、あたし、毎日あの子を見ているのが。…あたしは、見てはいけないものを今、見ているんだって気がして…見てはいけないもの…神様以外は」

榊原 「…仕方ないよ、誰かが世話をしなくちゃならないんだ。それでも、どうしても嫌だっていうんなら…彼らに任せる？」

佐都子 「駄目！それだけは駄目！あの人達はきつとあの子を生かしてはおかない」

榊原 「しかし、いつまでも隠しておけるわけじゃない。現に今日だって…」

少女 「バケツ！！」

八嶋 「バカ！」

榊原 「誰だ！？」

榊原、ドアを開ける。

佐都子 「八嶋くん…」

八嶋 「エへへ…ども」

榊原 「なんだ君か」

佐都子 「どもじゃないでしょう！ここは関係者以外立ち入り禁止よ、わかってるの！？」

八嶋 「わかって…ます。すみません。館内に残ってた女の子がこっちに来ちゃったもんで、追いかけて…」

榊原 「女の子？」

佐都子 「どこにいるのよ」

八嶋 「ここに…あれ？」

少女は消えていた。バケツを残して。

八嶋 「…バケツ」

佐都子 「わかるわよそんなこと言われなくても！まさかそのバケツが女の子に見えたっていうんじゃないでしょうね、幾らなんでもそこま

八嶋  
「……」  
「おかしくないわよね！」

八嶋  
「まあまあ、三村さんも落ち着いて。八嶋くんだって謝ってるんだからさ」

榊原  
「でも……」  
「いいから、八嶋くん、片付けは終わったのかい？」

八嶋、佐都子の肩に置かれた榊原の手から目が離せない。

八嶋  
「……ええ……まあ」

榊原  
「だったらもう帰るといい。今日の取水時間、浦安は8時からだろ。急がないと間に合わないよ」

八嶋  
「……」

佐都子  
「……お疲れ様」  
「じゃ、僕らはもう少しやってから帰るから……（ドアを閉めかけて）ああ、そうそう忘れずに仕舞っておいてね、その……女の子」

笑いを残してドアは閉じられる。

音楽、奥田民生「マシマロ」（やったな、石井！）。走り出す八嶋。

八嶋  
「畜生畜生畜生畜生畜生畜生！」

八嶋が走っている間に、舞台は転換していく。

舞台、また別の空間に、男（藤岡義介IIギスケ）と女（ミーナ）現れ対峙する。

ミーナ  
「……幾ら」

ギスケ  
「……」

ミーナ  
「幾ら持つてるのよ」

ギスケ、財布を抜き出し、ミーナの前に投げる。

ミーナ、財布の中身を改める。

ミーナ 「…ポケットの中身も出しな」

ギスケ、ゆつくりとポケットの中身を出し始める。汚いハンカチ、ガム、ライター…。  
一方、八嶋。  
走り疲れ、立ち止まる。

八嶋 「畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生…」

少女 「チクショーチクショーチクショーチクショー」

八嶋 「畜生畜生畜生畜生…」

少女 「チクショーチクショーチクショーチクショー」

八嶋 「…畜生畜生畜生畜松竹新喜劇…」

少女 「チクショーチクショーチクショーチクシンチゲチ…」

八嶋 「お前か…！」

少女 「（八嶋のラジオを差し上げ）レイドイオ！」

一方、ミーナとギスケ。

ギスケ、ポケットの中身を出し終え、ゆつくりと手を上へ。

ミーナ 「それで全部？」

頷くギスケ。すかさずミーナ、ギスケの首もとに手を差し入れ、虎の子のがま口をぶっちぎる。

ギスケ 「そ、それは！」

ミーナ 「バーカ、見え見えなんだよ！」



一方、八嶋と少女。

八嶋 「なんだってまた俺に付いて来たんだよ」

少女 「レイディオ！」

八嶋 「肝心な時にはいないくせにさ……」

少女 「レイディオ！」

八嶋 「しょうがない、何処か近くの警察に……」

少女 「レイディオ！」

八嶋 「違う、警察に行くの。わかる？ケ・イ・サ・ツ」

少女 「(必死で) レイディオ！」

八嶋 「え？」

少女 「(にっこり笑い、ラジオを八嶋の手に預ける) レイディオ……」

八嶋 「……ひよつとして、これを俺に届けるためにここまで……」

少女 「バケツ！」

一方、ミーナとギスケ。  
がま口を改めるミーナ。

ミーナ 「……しめて七千と800円か……しけてるねえ」

ギスケ 「ダメっすか、やっぱり」

ミーナ 「……しょうがない、今日は大サービス。これで手を打ってやるよ」

ギスケ 「有難うございます！！」

ミーナ、さかさか脱ぎ始める。

ミーナ 「ほらさつさと脱いで脱いで」

ギスケ 「ハイハイ」

ミーナ 「言っとくけど、キスはZQだからね」  
ギスケ 「ハイハイ」

ミーナとギスケ、重なり合ったその時。

八嶋 「ただいまっ…」

音楽止まる。

ドアを開けたまま凍りつく八嶋。

八嶋 「…失礼」

ドアを閉め、慌てて表札確認。ドアを開け放つ八嶋。

八嶋 「離れる！ヒトの部屋で何をやってる！離れんか！」

ギスケ 「よう、遅かったな」

ミーナ 「ずいぶん待ったわよ」

八嶋 「そんなカッコで冷静に応答するな！」

ギスケ 「始まったばっかなんだけど」

八嶋 「ぼっかでも駄目だ！」

ギスケ 「ちえ…ケーチ」

ミーナ 「ケーチ」

離れる二人。

ギスケ 「金、返してくれよ」

ミーナ、財布を放り投げる。

ギスケ 「おい2000円しか入ってねえぞ！」

ミーナ 「10分5000円。安いもんだわよ」

ギスケ 「ふざけるな手前…」

八嶋 「待てよ！大体なんでお前が俺の部屋にいるんだ」

ギスケ 「お前訪ねてきたら留守で、部屋の前で困ってたらその女が、カギ開けてくれて…」

八嶋 「は？」

ギスケ 「で、ただ待ってるのも退屈だからって…いや俺も彼女なのに悪いなと思って遠慮したんだよ、一応。そしたら金取るっていうから、なんだ商売ならいいかって…あんだよ。文句、あるのかよ」

八嶋 「…違う」

ギスケ 「何が？」

八嶋 「彼女なんかじゃない」

ギスケ 「へ？だって部屋のカギ…」

八嶋 「ミーナ！！」

ミーナ 「いいじゃん別にカギくらい。減るもんじゃないしさ」

八嶋 「減るよ！減ってるよ、確実に！どうも最近、おかしいと思ったんだ。味噌とか米とか醤油とか、お前持ち出してるだろう！」

ミーナ 「だって金目のもん何にもないんだもん、このウチ」

八嶋 「ふざけるなお前…」

ギスケ 「待てよ！じゃあこの女、いったい何者なんだ？」

八嶋 「ミーナっていつて…上の部屋に住んでる…ソープ嬢だ」

ミーナ 「元・ソープ嬢ね。ここんとこの湯水騒ぎでお店は開店休業状態、アタシもやむなく失業中」

ギスケ 「確かになあ。水がなけりや、ソープは開けないよなあ」

ミーナ 「そ。だからこうやって個人営業してるわけ。わかった？」

八嶋 「…まさかお前…いつもこの部屋使ってる営業してたんじゃない？」

ミーナ 「だあって自分の部屋に知らない男上げるの嫌なんだもん」

八嶋 「お前なあ…」

ミーナ 「怒らないでよ、その子が怖がつてるじゃない」

少女、ドアの所に立ちすくんで入る。

八嶋 「そうだった、この子がいたんだった。：おいで、怖くないから」

ミーナ 「男はみんなそう言うのよ」

八嶋 「(ミーナをひと睨みして) 悪かった、もう怒鳴らないよ」

八嶋に手を引かれて、少女、おずおずと部屋にはいる。

ギスケ 「誰？」

八嶋 「勤め先の水族館で迷子：になってて：警察に、と思ったんだけどどうも：障害があるみたいで」

ミーナ 「障害？」

八嶋 「(自分の頭を指して) ここに」

ギスケ 「パーってこと？」

八嶋 「そういう言い方やめろよ」

ギスケ 「いいじゃん、どうせ何言われてるかわからないんだろ。な？パー」

少女 「ぱー！」

ギスケ 「ほら。喜んでる」

八嶋、ギスケの胸倉をつかむ。

八嶋 「もう一度同じことしてみる。いくらお前だからって許さないぞ」

ギスケ 「わ、わかったよ、冗談だよ冗談：なに熱くなってるんだよ：」

八嶋 「言っただけのことと悪いことと、あるだろうが」

ミーナ 「でもさあ、そんな子だったら余計に警察に連れてったほうがいいんじゃないの？親御さんだって心配してるよ、きっと」

八嶋 「そりゃそうなんだけど：今日はもう遅いし：明日、出勤前に連れていこうかなって。な、その方がいいよな？」

少女 「ナ」

ミーナ 「あんた…小さい頃、捨て猫匿ったクチでしよう」

ギスケ 「そのうち情が移って捨ててるに捨てられなくなつて」

ミーナ 「結局自分で世話することに」

ギスケ 「ロコミで噂は広がって」

ミーナ 「あつちこつちから三毛だの」

ギスケ 「縞だの」

ミーナ 「ぶちだの」

ギスケ 「トラだの」

ミーナ 「猫を捨てに来るようになり」

ギスケ 「ついたあだ名がマタハリ」

ミーナ 「もとい、」

ギスケ 「ハリマオ」

ミーナ 「ならぬ」

二人 「怪傑マタタビ」

八嶋 「なんで知ってるんだ」

少女 「マタタビ！」

そこに荘厳な音楽！そして贅沢な明かり！

一陣の風に乗って、怪しい風体のババア（近藤シズエ）登場。

八嶋 「しまった！まだ寝ていなかったのか！」

ミーナ 「夜は早いはずなのに…」

ギスケ 「だ、誰だ、誰なんだあのババアは！？」

ミーナ 「日吉荘の、生涯一処女（エターナルバージン）！」

ギスケ 「なんじゃそりや！？」

八嶋 「見るな、見ちゃいけない！」

ミーナ 「悲しみが押し寄せるわ！」  
ギスケ 「はあ？」

シズエ、ギスケにねらいを定め一直線に。

シズエ 「そなたの前世を詔奉るゝ」

ギスケ 「前世？」

シズエ 「そなたの前世はゝ」

全 「前世は！？」

シズエ 「∴『いなだ』」

音、光、収まる間。

ミーナ 「出たわね、久々に魚類が」

八嶋 「ここんところ、ずっと爬虫類が続いていたから新鮮だな」

ミーナ 「ね」

ギスケ 「なんだよいなだって、いなだって」

ミーナ 「ブリのちっこいやつ」

ギスケ 「それは知ってるよ、いなだが何かって聞いてるんだよ」

八嶋 「だから占いだよ」

ギスケ 「え∴動物占い？」

シズエ 「喝！」

八嶋 「馬鹿、ここではそれはタブーだよ」

ミーナ 「それ以上言うと、シズエさん半狂乱になるよ、奴らに印税盗られたって」

ギスケ 「じゃあ…」

八嶋 「さっき言ってただろ、前世占いだって。シズエさんはそのヒトの前世がわかるんだよ」

ギスケ 「じゃあ、なにか、俺の前世は『いなだ』だと」

シズエ 「(重々しく頷き) 生まれは播磨灘…鳴門海峡にもまれ身の締まった、いらい『いなだ』じゃった…」  
ギスケ 「ふざけんな、なんで俺が魚なんだよ！しかもブリじゃなくミョーに中途半端な『いなだ』…」

八嶋 「最初はみんな、呆然とするのさ」

ミーナ 「だから言ったでしょ『悲しみが押し寄せる』って」

ギスケ 「煩い！大体あんた、ここまです『いなだ』でここからがブリってわかるのかよちゃんど！」

シズエ 「わかるとも」

ギスケ 「じゃあ教えてくれよ、どこまでが『いなだ』でどこからがブリなんだよ」

シズエ 「大きいのがブリじゃ。で、それより小さいのが『いなだ』」

ギスケ 「じゃ拒食症のブリは」

シズエ 「いなだじゃ」

ギスケ 「過食症のいなだは」

シズエ 「ブリ」

ギスケ 「それじゃ最初過食に陥ってその後小康状態を保ち、1年後に今度は拒食に陥った後、周囲の励ましでだんだん食欲の出てきたいなだは！？」

「…」

シズエ 「…『わらさ』」

ギスケ 「なんだよそれ」

シズエ 「いなだとブリの中間魚」

ギスケ 「いい加減なこと言うな、くそババア！」

シズエ 「喝！！」

思わず腰を抜かすギスケ。

シズエ 「前世に文句を言っても始まらない。そなたは、ブリになる前に死んだ不運な『いなだ』じゃ。出世魚として、志なかばで果てるのは、

さぞ無念じゃったろう。その思いが強いがゆえに、そなたはこの現世(うつつよ)でも必死にあがいておる…上へ行こう、少しでも

上に登ろう、とな…」

ギスケ 「う…」

ミーナ 「え、当たってるの？」

八嶋 「…ギスケは…役者なんだ、まだ売れてないけど。でも何とかメジャーになろうと必死で努力してる…」

ミーナ 「じゃあ…」

八嶋 「…応えただろうな…」

ミーナ 「ミスターいなだ…」

ギスケ 「…俺が…俺の芽が出ないのは、前世の所為だと…」

シズエ 「そうは言っておらん。いや、前世に禍根を遺したからこそ、現世でそなたは頑張ろうとする。ヒトの二倍も三倍もな…わしは、何もいなが悪いなどとはちいとも言っておらん。ただ、何故ゆえにそなたはそうまで頂点に立とうと固執するのか…そのおおもとの『因縁』を知っておいてもらいたいのじゃよ」

ギスケ 「…」

シズエ 『因って立つ縁』がわかれば、この生き難い世の中も少しは明るく見えるようになる…わしが人々にもたらしたいのは、そんな小さな灯火じゃ…」

ギスケ 「…」

シズエ 「じゃがな…どんな小さな灯だとして無いよりはまし。それほどまでに、生きていくのは辛く、そして苦しい…そうは思わんか、お若い…」

ギスケ、がしつとシズエの手を取る。

ギスケ 「俺は…俺は今まで濃い、霧の中で生きていたように思います。でも、今その霧は晴れた…師匠、いやお師匠様！」

ミーナ 「おっしよさまあ!？」

ギスケ 「どうか俺を、お側に置いてくださいえ！」

シズエ 「ならぬ。それはならぬぞえ」

ギスケ 「な、何故ゆえに!？」

ミーナ 「ね、ミスターいなだ、大河ドラマ入ってない？」

シズエ 「わしは、生涯伴侶は持たぬと誓った、いわば神に嫁いだ巫女じゃ。今更そなたのような若い男衆をそばに置くことはできぬ」

ギスケ 「では…」

ギスケ、ミーナをきつと睨む。



ギスケ 「…私、藤岡義介今日からは、この女性（によしよう）の部屋にて起居いたしまする」  
ミーナ 「げっ!!」  
ギスケ 「ご用があまりの折は、なんなりとお申しつけください」  
ミーナ 「ば、馬鹿いつてんじゃないわよ!なんであたしが…」  
八嶋 「まあそう言うなよ」  
シズエ 「困った時はお互い様」  
ギスケ 「仲良くやろうよ、ミーナちゃん」  
ミーナ 「あんたねえ…」

その時、成り行きを見ていた少女が、突然話し出す。

少女 「ア…アタシ」  
八嶋 「え？」  
少女 「アタシ、ミ…ミル…ミテ」  
シズエ 「…」  
ミーナ 「しゃ、しゃべった…」  
ギスケ 「嘘だろ…だつてさっきまで…」  
シズエ 「口、きけなかったのかい」  
八嶋 「きけないどころか…赤ん坊くらいの脳みそしか…」  
シズエ 「赤ん坊…それは、おもしろい…おいでお嬢ちゃん」

少女、ニコニコ笑いながらシズエの前に立つ。

シズエ 「手を…お出し」  
少女 「テ？」  
シズエ 「手…これだよ、あんたの肩から生えてる、この先っぽの割れた肉体」

少女 「コレ…テ」

シズエ、少女の手を包み込む。

シズエ 「あったかい手だねえ…お嬢ちゃん」

少女、にっこり笑う。

シズエ、目を閉じて思念を飛ばす。固唾を飲んで見守る3人。  
音楽！それは、切なく、苦しいほどの。

シズエ 「…？」

シズエの目が、極限まで見開かれる。

シズエ、昏倒する。

八嶋 「シズエさん！」

ギスケ 「お師匠さん！！」

ミーナ 「さわらないで！ギスケ、運んで早く！」

ギスケ 「ど、何処に…」

ミーナ 「決まってるでしょ、病院よ！あんた車は！？」

ギスケ 「の、乗ってきたすぐ其処に…」

ミーナ 「すぐ玄関に回して！日赤が近いわね、そこに行こう。八嶋！」

八嶋 「は、はい！」

ミーナ 「その子、よろしく」

八嶋 「え…？」

ミーナ 「顔色、真っ青…いつ倒れてもおかしくないよ、その子も」

ミーナ、飛び出す。続いてシズエを抱えたギスケも続く。

一瞬のうちに静けさに包まれる舞台。

大きな吐息をつく八嶋。

部屋の隅で震えている少女に近づいていき、そつと頭に手を置く。  
びくりとする少女。

八嶋

「…さつきも言ったろ…怖がらなくてもいい…誰も君を苛めやしないから…」

少女、八嶋の胸の中で静かに泣く。

八嶋、少女の髪を撫でながら。

八嶋

「…今日は…色々なことがあって…正直、俺も疲れたんだ…でも君はもともと疲れたろう…」

少女、かすかに頷く。

八嶋

「俺の言ってること、わかるのかい」

少女、かすかに頷く。

八嶋

「すげえや…君はまるで…進化の過程を一気に駆けぬけてるようだ…有り得るはずのないことだけれど…俺にはそんな気がしてならない…」

八嶋、少女の顔をじっと覗き込む。

八嶋

「君は…誰なんだ？何故…ここにいる」

少女の臉がだんだんおとりてくる。

八嶋 「眠いの？」  
少女 「ネムイ…ナニ？…」

首をかしげた少女、そのまま倒れこむように八嶋の腕の中へ。そして寝息をあつという間に立て始める。八嶋、苦笑いして少女を布団に運ぶ。傍らに寄り添い、静かに子守唄を歌う。

八嶋 「おやすみ…」

その時。

佐都子 「涉びよん！今日は、ほんつつつとごめん！！」

飛び込んでくる佐都子。

飛び起きる八嶋。

寝ぼけ眼でその八嶋に抱きつく少女。

佐都子 「…」

八嶋 「…」

少女 「ワタルピョオン…」

佐都子 「…失礼」

ボタンと閉まるドア。外で表札を確認する佐都子。  
あっけにとられる八嶋。  
ほぼ同時に再び開くドア。

佐都子 「この裏切り者裏切り者裏切り者！」

八嶋 「ご、誤解だ誤解だよサトちゃん！」  
佐都子 「この状況の何処が誤解なのよ!!」  
八嶋 「見てくれ、この子の顔！」

佐都子、じつと少女の顔を見る。

八嶋 「な？わかつたろう？」

佐都子 「…わかつた」

八嶋 「良かった…」

佐都子 「きい!!若くて、しかもかわいい!!あんたなんかこうしてやるこうしてやる!!」

佐都子、八嶋の首をしめる。

八嶋 「く、苦しいギブギブ！」

佐都子 「ひどいじゃない、いくらあたしが冷たく当たったからって、何も他の女連れこむこと、ないでしょう！」

八嶋 「だから違うって!さつき、追いかけてた女の子がいたって言ったろう!?それが、この子なんだよ」

佐都子 「え…」

八嶋 「(咳き込みながら) あのあと…俺の家まで付いて来ちゃって…そのままほっぽって置くこともできないだろう?だから今晚一晩、泊めることにした…」

佐都子 「じゃあ…」

八嶋 「そう。全てサトちゃんの誤解。この子はただ泊めてるだけ」

佐都子・少女 「泊めてる、だけ？」

八嶋 「…安心した？」

佐都子 「…うん…」

少女 「ウウン…」

佐都子 「ごめん…心配で堪らなかったから…涉びよん、あたしのこと、嫌いになったんじゃないかって」

八嶋 「どうして」

佐都子 「…だってあたしさつき、ひどいことした…」

八嶋 「しようがないよ、だってあれは…仕事だもんね」  
少女 「シゴト…」

佐都子 頷く。

八嶋 「時には、したくないことも、しなくちゃならないこともある…」

少女 「…シタク、ナイコトモ…シナクチャ…ナラナイ」

佐都子 「今夜、泊まってもいい？」

八嶋 「え…でもこの子が…」

佐都子 「わかってる。あたしも…（含み笑いをして）泊まるだけ」

八嶋 「本当だな」

佐都子 「本当よ…」

八嶋と佐都子のいる空間の明かりが落ちる。  
その輪から外れたところで、少女。

少女 「アタシハ、アナタノシゴト？…ヤシマ…」

少女、傍らに置いてあるラジオのスイッチを入れる。  
流れ出る音楽に耳をすませる。舞台は転換していく。  
別の空間に目隠しをした男（鳩）が現れる。鳩、ゆっくりと少女に近づく。

鳩 「どうしたの。何がそんなに寂しいの」

少女 「サミシイ…？」

鳩 「あなたの今の気持ち…『寂しい』っていうんだよ」

少女 「…」

鳩 「寂しい、悲しい、切ない、辛い…この世はね、そんな気持ちでいっぱいだからもうすぐ世界は溢れる…水が、盃から零れるよ」

うに…つうつと…何処までも何処までも…」

少女

鳩

「…零れてしまった水は、もう元には戻らない。だとしたら…『零れた世界』で生きていく術を、私達は見つけなくてはならない…  
わかるね？」

少女

「…」

鳩、さらに少女に近づく。

鳩

「顔をあげてよく見せて…そうしてこっちへおいで…」

少女、鳩の伸ばした手をつかもうとする。

と、女が二人の間に入る。

鳩

「誰だ!？」

女

「…この子には、まだ時間が必要です」

鳩

「…」

女

「…決めるのは、もう少し後でいい…」

女、少女消える。

同時に鳩、倒れこむ。駆け寄る女(牝猫)。

牝猫

「鳩!お気を確かに、鳩!」

鳩

「…逃げられました…あと少しで手が触れたのに…」

牝猫

「あまりお話にならない方が…」

鳩

「女…そう、女でした…私とあの子の間に入って来た…誰だったのか…何処かで会っている、そんな気がする…」

牝猫

「…蠅でしようか？」

鳩

「馬鹿なことを!蠅なぞにたやすく入ってこられる場所ではない!」

「牡猫」 「申し訳ありません」

「鳩」 「でもこれでようやく確信が持てました…牡猫」

「牡猫」 「はい」

「鳩」 「メシアは降臨している！…滅亡の時は近い。しかし救いの日もまた近いのですよ」

「牡猫」 「はい！」

「鳩」 「牡猫！…いますか牡猫！」

男（牡猫が現れる）

「牡猫」 「お呼びでしょうか、鳩」

「鳩」 「『視えたもの』を話します。二人とも聞き漏らさないように」

二人 「はい」

「鳩」 「…大きな河2つに挟まれた町…海が近い、潮の香りがある…高架の線路…巨大な蜂の巣のような高層マンション…」

「牡猫」 「海辺のニュータウン？」

「鳩」 「鳩、なにか目印になるようなものは？」

「…（顔をしかめ）人工の城、人工の山…下らぬ箱庭だ。空虚な、見せ掛けだけの幸せ…その近くに…銀色のドーム…あれは…鏡？

いや、水だ、水に囲まれたドーム…」

「人工の城と山…銀のドーム？」

「わかった、デイズニールランドだわ！そして銀のドームは『海と光の水族館』…」

「とするとその町は…東京湾岸…」

「お台場…それとも浦安かしら」

「…古ぼけた小さなアパート…住人は若い男…呼ばれていた名は…ヤ…ヤシマ。ヤシマ・ワタル」

「牡猫」 「ヤシマ」

「牡猫」 「ワタル…」

「鳩」 「そこにメシアはいる…。牡猫、そして牡猫」

二人 「はい」

「牡猫」 「すぐにその部屋を探しなさい。そしてメシアの動きを見守るのです、なるべくお側に住み着いて」



「はい」

「あの…住む、というのは…私達二人で…」

「当たり前でしょう、あなた達は私が自ら祝福した…聖なる番…なのですから」

「で、ですが未だ私達は…その…」

鳩、冷たく厳しい目で。

「それがおかしいのです。番として祝福されたらすぐにでも生活を共にするべき。それができないというのは、牡猫を、ひいて

はあなた達を聖別した私をも疑っているということ。だとしたらあなたには、『最後の方舟』に乗る資格はありません」

「そんな、そんな気持ちは毛頭ありません！鳩、あなたを疑うなど…」

「ならば今すぐに行動を起こすことです」

鳩、立ちあがる。

「どちらへ？」

「能力を使い過ぎました…少し、休みます」

鳩、去る。その姿を目で追う牡猫。

その肩を牡猫、ぼんと叩いて。

「行こう」

牡猫、頷いて歩き出すがよろける。

慌てて支える牡猫。

「大丈夫か」

「…一人で歩ける…構わないで」

「牝猫、去る。その後を追って、牝猫も去る。  
舞台別の空間にミーナと少女。」

二人 「独占スクープ、デビ夫人とサッチーのペアヌード写真集発売！！」

ラジオがかかっている。子どもが喜びそうな番組。

ミーナ 「ハイつぎ」

少女 「仰天！ 叶姉妹（姉）は男だった！？」

ミーナ 「ハイつぎ」

少女 「ああ鬼、鬼…」

ミーナ 「鬼嫁」

少女 「ああ鬼嫁！ガングロ16歳若妻が」

二人 「姑に熱湯！！」

そこへ八嶋と佐都子が揃って帰ってくる。

八嶋 「ただいま」

佐都子 「こんばんは」

少女 「ヤシマ！お帰り！！」

ミーナ 「ちーす。珍しいじゃん、二人お揃いなんて」

佐都子 「残業がなかったから。それよりあの…」

八嶋 「何だよ『姑に熱湯』って」

ミーナ 「お勉強してたんだよね」

少女 「うん」

佐都子 「勉強？」

ミーナ 「そ、これ使って」

ミーナ、雑誌を見せる。

佐都子 「…女性自身…」

ミーナ 「すごいよ、この子、もう殆ど漢字も読めるよ」

八嶋 「なんで女性自身使うんだよ！どうせならもうちよっと知的な雑誌使えよ！」

ミーナ 「しょうがないじゃん、アタシが読むの、これっくらいだもん」

八嶋 「知識が偏るじゃないか！鬼とか嫁とかデビ夫人とか」

ミーナ 「うるさいなあ。あんたが働いてる間、ただでこの子の面倒見てるんだからね、細かいこと言わないでよ」

八嶋 「そりやそうだけどさ…」

佐都子 「あ、あのミーナさん、これ差し入れです」

ミーナ 「ビール！！嬉しい、咽喉カラカラだよ」

ミーナ、早速「本開け、うまそうに飲み干す。

少女 「あたしも」

八嶋 「お前は駄目。水の汲み置きがあるだろ、それ飲みなさい」

少女 「(舌打ちして)…エロダコ」

八嶋 「あゆみ！！」

少女(あゆみ) 逃げ出す。大笑いするミーナ。

八嶋 「ああ…早くも悪影響が…」

佐都子 「ねえ今あゆみって…」

八嶋 「え？ああ、名前だよあの子の」

佐都子 「思い出したの！？」

八嶋 「そうじゃなくて…一緒に暮らしてるのに、おいとかお前じゃ不便だろ。だから俺が付けたんだ」  
佐都子 「なんで『あゆみ』…」  
ミーナ 「自分の名前から取ったんだってさ」  
佐都子 「え？」  
ミーナ 「涉からさんずいを取ると？」  
佐都子 「…あゆみ…」  
ミーナ 「笑っちゃうよねー自分の子でもないのにさ」  
八嶋 「うるせえ」  
佐都子 「…」  
ミーナ 「しっかし暑いねえ。いつになったら雨が降るんだろ」  
八嶋 「(ビールを開けながら) 雨が降らなくなってもう20日?」  
ミーナ 「とんでもない、ゆうに1ヶ月は過ぎてるよ。しかもそれが日本だけじゃなくて世界中どこもかしこもっていうんだから…」  
佐都子 「変だわ」  
八嶋 「変だね」  
ミーナ 「ホント、変だよ」  
佐都子 「どうして一緒に暮らしてるのよ」  
八嶋・ミーナ 「は？」  
佐都子 「もともとは一晩だけってはずだったじゃない。あれから何日も経つのに…八嶋君、警察にも連絡してないでしよう」  
八嶋 「それは…どうやらあゆみは障害があるんじゃないって、記憶喪失に陥ってるだけのようだから、思い出すまで保護しようかと…」  
佐都子 「だけって何よ、だけって。記憶喪失だって立派な病気よ、ちゃんとした処置をしてくちや取り返しのことにならないかもしれないじゃない」  
八嶋 「そうだけど…あゆみ、すっかりここに馴染んでるし…今さら警察に連れていくのもかわいそうかなと思って…」  
佐都子 「…マタタビ」  
八嶋 「え？」  
佐都子 「怪盗マタタビ！淫行で捕まってもしらないから！」  
八嶋 「な、何わけのわからんことを…」  
ミーナ 「ご覧。これが生痴話喧嘩」

あゆみ 「生痴話喧嘩…」  
八嶋・佐都子 「違います!!」

そこへ、シズエをおぶったギスケが帰ってくる。

ギスケ 「ただいま」

ミーナ 「シズエさん、大丈夫？」

シズエ 「大丈夫大丈夫。自分で歩けるといふのにこの男が…」

八嶋 「退院おめでとう」

佐都子 「おめでとうございます」

シズエ 「ありがとうございます」

ミーナ 「ほら、あんたも」

ミーナ、小さくなっているあゆみを引っ張ってくる。

八嶋 「気にしてるんですよ、自分のせいでシズエさんが倒れたんじゃないかって」

ギスケ 「んなわけねーのになあ」

ミーナ 「過労だったんでしょ」

ギスケ 「そ。医者に言われちゃったよ『もっとお母さんを労わりなさい』って」

一同、笑い合い勝手に雑談を始める。

シズエその輪を外れ、あゆみの近くへ行く。

シズエ 「(静かな声で) 安心おし。誰にも言わないから…」

あゆみ、首をかしげる。

シズエ微笑して。

シズエ 「未だ、気がついてないのか。…ここが好きかい？」

あゆみ、大きく頷く。

シズエ 「なら、その方がいい。その方が、いいよ…」

あゆみ 「あゆみって言います。退院おめでどう、シズエさん」

シズエ 「あゆみ…良い名前だね」

あゆみ 「ヤシマがくれたの。渉からさんずいを取ったんだって」

シズエ 「さんずい…水を、取ったのか…」

シズエ、静かに微笑み。

シズエ 「その名前が、あんたを守ってくれますよう…」

あゆみ 「？」

ミーナ 「その二人！何こそそしゃべくってるのよう」

ギスケ 「飲もう！今夜はとことん飲もう！ささ師匠…」

ギスケ、シズエにビールを勧める。

ミーナ 「はい、あんたはコーラ」

あゆみ 「ありがとうございます」

ギスケ 「えーそれでは、師匠・近藤シズエの退院を祝いまして、乾杯！」

全員 「乾杯！」

ビールを飲み干す間。いやあ実に夏向きの、いくい芝居だなあ…

佐都子 「ねえ、ところでギスケさん」

ギスケ 「はい」

佐都子 「本当にミーナさんのところに居候してるの？」

ギスケ 「そりゃあもう。いつ何時でも師匠の元にはせ参じることができるよう……」

ミーナ 「嘘つけ。単に住む場所がないから居座ってるくせに」

佐都子 「そうなの？」

ミーナ 「そうよう。だってこいつ、もともと八嶋のところに金借りに来たんだよ」

八嶋 「言っとくけど、俺、金はないぞ」

ギスケ 「知らなかったんだよ、お前が会社辞めたの。確か印刷会社の営業だったよな。なんで辞めちゃったんだよ、この不景気に勿体無い」

八嶋 「……ちよっと……体壊して」

気まずい間。聞いてはならない話題だったらしい。  
慌てるギスケ。

ギスケ 「ま、プーの俺が言うことじゃないよな。で、今は佐都子さんの紹介で……」

佐都子 「うちの水族館で清掃のバイト、やってもらってるの。評判、良いよ、真面目でよく働くって」

八嶋 「バイトだから。大したこと、やってないから」

ミーナ 「でもいいじゃん、彼女と同じ職場で。公私ともに支え合い」

ギスケ 「そうそう、で、やがて生涯のパートナーに。するんだろ、結婚」

八嶋 「したいけど……今の俺じゃ……」

再び気まずい間。さらに聞いてはならない話題だったらしい。  
慌てるギスケ。

ギスケ 「ま、結婚なんて急ぐ必要はないからね、もうせくんぜん、うん……」

ミーナ 「ギスケ、うるさい。もうしゃべるな」

ギスケ 「くうくん……」

八嶋 「お前こそいいのかよ働かなくて」  
ギスケ 「だって仕事、ないんだもん」  
八嶋 「えぼるなよ、みっともない」  
佐都子 「じゃ、ミーナさんが面倒みてるわけ？」  
ミーナ 「冗談！なんでアタシが赤の他人の面倒みなきゃならないのさ」  
佐都子 「あ、一緒に暮らしてるからって何かあるわけじゃないんだ」  
ミーナ 「当然よ。誤解しないでよねえ。その辺、きっちりしてるからアタシは。ヤル時はちゃんと金取るし」  
ギスケ 「(悲しそうに)」「回」「万円」  
ミーナ 「いわゆるお友達価格ってやつ？」  
佐都子 「ははあ…」  
八嶋 「もう何がなんだか…」  
ミーナ 「ところでさ、佐都子ちゃんの勤めてる…なんだっけ」  
佐都子 「海と光の水族館？」  
ミーナ 「そうそこ、今日ラジオのニュースで出てたよ。鯨の胎児がどうか」  
ギスケ 「鯨の胎児？」  
シズエ 「ほれ先月、静岡で保護された…」  
八嶋 「ああ、それならサトちゃんが担当だよ、ね」  
佐都子 「(少し慌てて) 涉ちゃん…」  
ミーナ 「すごいじゃん」  
佐都子 「担当って言っても…様子を見守るくらいで…」  
ギスケ 「鯨かあ。いいなあ、見てみたいなあ」  
ミーナ 「ねえ、特別にさ、見に行けたりしない？担当者の特権でさあ」  
佐都子 「あの…今はまだ弱ってて…一般に公開できる状態じゃ…」  
ミーナ 「そっか。じゃそのうち元気になったら絶対、見せてね」  
ギスケ 「俺も俺も」  
佐都子 「…そうね…いつか、元気になったら、ね…」



雑談を始めるミーナたち。その横で物思いに沈む佐都子と、ノックの音。

ドアの外にたたずむのは、**牝猫**と**牝猫**。

八嶋 「誰だろう、こんな時間に…」

シズエ 「セールスマンじゃるか」

ギスケ 「居留守、使っちゃえば」

ミーナ 「ばればれだよ、ドアも壁も薄いんだから」

八嶋、ドアを開ける。

八嶋 「はい」

**牝猫** 「こんばんは。あの、私ども、今日隣の部屋に引っ越して参りました小早川と申します。ご挨拶に、と思ひまして。こちらが妻の明子です」

**牝猫**、頭を下げる。

八嶋 「それはどうもご丁寧に。八嶋です、よろしくお願ひします」

**牝猫** 「あの、そちらの皆様はどういう…」

ミーナ 「このポロアパート、日吉荘の住人。201号室、ミーナですよろしく」

ギスケ 「その居候のギスケ」

シズエ 「202号の近藤です。よろしければ前世なぞ…」

**牝猫** 「は？」

ミーナ 「シズエさんは前世占い師なの」

**牝猫** 「前世占い？」

ミーナ 「そう。見てもらったら？人生変わるわよう」

**牝猫** 「(吐き捨てるように) 汚らわしい！」

ギスケ 「ああ？何か言ったか、今」

≡牝猫≡ 「い、いえ、何でもございませぬ。あの、それでは残りのお二人もここの…」

佐都子 「あたしは部外者。八嶋君の友人です」

ミーナ 「友人だって」

佐都子 「うるさいなあ」

≡牝猫≡ 「その、お若い方も…」

ミーナ 「ああ、あゆみ？ほらごあいさつごあいさつ。教えたでしょう」

(恐る恐る) 「初めまして。あゆみ、です」

≡牝猫≡ 「あゆみさんも、八嶋さんのお友達？」

ミーナ 「違うわよ、この子はねえ、八嶋くんが拾ってきたの」

≡牝猫≡ 「拾ってきた？」

八嶋 「やめるよ、誤解招くだろう」

ミーナ 「だってホントのことじゃん」

≡牝猫≡ 「それはまたどういう」

佐都子 「大したことじゃないんです、ちよっとしたこと知り合って、その…あゆみちゃん、東京に知り合いがないもんだから、それでここにしばらく泊まることになって。ね？」

ギスケ 「そうそう」

シズエ 「その通りじゃ」

ミーナ 「で、アタシが色々教えただげてるの。この子キオクソーシツみたいでさあ、最初口もきけなかったんだよ」

≡牝猫≡ 「それは、大変だ…」

≡牝猫≡ 「ぜひ詳しく伺いたいわ」

ミーナ 「いいですとも。いらはいいらはい」

八嶋 「よせよ、酔っ払ってるだろ、お前」

佐都子 「意外。ミーナさんてお酒弱いんだ」

ミーナ 「弱くない弱くない酔ってない酔ってない」

佐都子 「まがもこまがもまがもひまごまがもハイ」

ミーナ 「まがもこまがもまがもひまごまがもハイ！！ (舌を噛んだらしい)」

八嶋 「とうわけで、今夜は…」

牝猫 「あのでも」

ギスケ 「お引き取りください」

牝猫 「さっきの記憶喪失…」

牝猫 「(牝猫を遮って) わかりました。夜分に失礼しました。行くよ明子」

牝猫 「でも…」

牝猫 「…行くよ」

牝猫 「…はい…」

牝猫、深深と頭を下げ、静かにドアを閉める。  
いったん去る二人。

佐都子 「行っちゃった…」

八嶋 「なんか、キモチワルイ夫婦だったな」

ギスケ 「お前もそう思った？俺もさく顔見た途端に、なんかこう、嫌あな感じがしたんだよ」

佐都子 「仮面」

八嶋 「え？」

佐都子 「仮面、被ってるみたいだったよね。感情や生気がなくて」

八嶋 「…」

シズエ 「何者なんじゃろう」

ミーナ 「はい！ミーナさんわかりました！」

八嶋 「言ってみろ」

ミーナ 「あのヒトたちは何にも食べてないんです。だから」

八嶋 「だから？」

ミーナ 「勘定がない！」

八嶋 「…」

一人オオウケしているミーナ。

あゆみ  
八嶋  
「どうしよう。ミーナさんの言ったことわからないよヤシマ」  
「わからない方が幸せだ」

舞台別の空間。  
言い争っている牝猫と牝猫。

牝猫  
「落ち着いてくれよ牝猫」

牝猫  
「私は落ち着いています、とても冷静です」

牝猫  
「だったら…」

牝猫  
「ただ納得がいけないと言ってるんです。なぜあのまま引き下がったのか」

牝猫  
「引き下がったわけではない。初めての訪問にしては収穫が多かった。あれ以上しつこくして、かえって不信感をもたれるのを避けただけだ」

牝猫  
「しかし、何度もこんなチャンスがあるとは限りません。突っ込める時にできるだけ突っ込んでおいたほうが…」

牝猫  
「それは間違いだ。人は、一度不信感を持った相手には容易に心を開かない。鳩の歩んできた道のりを知らないわけでもあるまい？」

牝猫  
「(激昂して) 当たり前でしょう！ 私は、『最後の方舟』がまだ数人しかいなかった頃から鳩と共に歩んできたんです！ その私に対して、何と言う、何と言うことを…」

牝猫  
「静かに。声が大きい」

怒りに震える牝猫。そのまま牝猫に背を向ける。

ため息をつく牝猫。牝猫に擦り寄る。

牝猫  
「…悪かったよ、僕も言い過ぎた」

牝猫  
「…」

牝猫  
「ね…機嫌直してくれよ…」

牝猫、そのままゆつくりと牝猫を背後から抱きしめ、うなじに唇をつける。  
振り払う牝猫。

牝猫「やめてください」

牝猫「どうして？ 僕達は鳩に祝福された聖なる番だ。いわばこの地上に良き種を残すよう、義務付けられている存在なんだよ」

牝猫「わかっています、そんなことは」

牝猫「だったら何故、僕を拒むのだ」

牝猫「拒んでなど…」

牝猫「いるとも。その証拠に、一度も体を開いてくれない…」

牝猫「…」

牝猫、再び牝猫に手を伸ばす。

牝猫「…ここは方舟の中じゃない…周りには誰も居ない…」

牝猫「…」

牝猫「ここならいいだろう…」

牝猫、咄嗟に立ちあがる。

牝猫「何処へ行くんだ」

牝猫「鳩に会って来ます」

牝猫「はあ？」

牝猫「今日の出来事を報告せねば…」

牝猫「それは明日が良い。報告は毎日でなくても構わぬと、鳩自身がおっしゃっていただろう」

牝猫「でも私は今日、鳩に報告したいのです」

牝猫「おい…」

牝猫「今晚は戻らないかもしれません」

牝猫、飛び出していく。

牝猫「……どら猫め……」

その頃二人の部屋の様子を伺っていた女(都築弥生)がいた。  
弥生、牝猫が飛び出して行ったのを確かめ、八嶋の部屋をノックする。

八嶋「またかよ」

ギスケ「今日はやたら多いな」

ミーナ「アタシ出ようか」

シズエ「あんたは寝てなされ」

八嶋、ドアを空ける。

八嶋「どなたですか……」

弥生、すかさず部屋に入りこみドアにカギをかける。

八嶋「ちよ、ちよつとあんた……」

弥生「静かに！怪しいものではありません」

八嶋「怪しいよ、どう考えても……」

弥生「静かに！……隣で牝猫が聞き耳を立てているかもしれない」

ギスケ「牝猫オ？」

ミーナ「ペット禁止よ、ここ。あ、でも前にシズエさんハト飼ってたね」

シズエ「あれは勝手に住みついたのじゃ」

ミーナ「でも名前つけてたじゃん」

あゆみ 「なんて？」

ミーナ 「ハト」

ギスケ 「まんまやん師匠……」

この間弥生は壁に耳をつけて隣の物音を聞いている。  
「牡猫、いびきをかいて寝て居る。」

弥生 「……どうやら眠ったみたい……」

八嶋 「あのさあ、いきなり人の部屋に入りこんでおかしな真似しないでくれる？」

弥生 「失礼しました。私、こういうものです」

弥生、八嶋に名刺を渡す。

ミーナ 「だあれ」

八嶋 「……フリーライター 都築弥生」

シズエ 「横文字は嫌いじゃ」

弥生 「平たく言えば、雑誌記者です」

シズエ 「だったら初めから平たく言えばええものを」

ミーナ 「で。その記者さんがうちに何の用？」

八嶋 「俺んちだ！」

弥生 「……先ほど、男女が」組、こちらに現れましたよね？」

八嶋 「え？ああ」

佐都子 「来ましたけど。それが何か？」

弥生 「なんて言っていました？」

顔を見合わせる人。

ギスケ 「：隣に越してきた小早川だつて：」

弥生 「それ嘘です」

ギスケ 「嘘？」

弥生 「偽名です、明らかに」

ミーナ 「ちよつと待ってよなんで偽名なんか使うわけ？大体、なんであんたがそんなこと知ってるのさ」

弥生 「偽名を使ったのは、彼らが名前を失ってしまったから。私が知っているのは、彼ら、いえ彼らの属する団体をずっと追いかけているからです」

佐都子 「どういうこと」

弥生 「彼らは『最後の方舟』というカルト教団の最高幹部です。『最後の方舟』では、信者から戸籍名を剥奪します。そして代わりに教祖が新しい名前を与える。ちなみに彼らの名前は猫。≡牡猫≡と≡牝猫≡です」

ギスケ 「え：動物占い？」

シズエ 「喝！」

弥生 「違います」

シズエ 「当たり前じゃ。前世男はトロかつお、女の方は甘鯛じゃった」

八嶋 「さいきん寿司ネタ系多いな」

ミーナ 「暗に食わせると言ってるのかな」

弥生 「占いではなくて、そう、オウムというホーリーネームのようなもの」

佐都子 「ふうん：」

ギスケ 「で、その何とかの方舟：」

弥生 「『最後の方舟』」

ギスケ 「それがどうしてうちの隣に越してきたわけ？」

八嶋 「俺んちだつてば！」

弥生 「そこまでは：。ただ、猫二人が動き出したのが先週の金曜日。それから今日まで、ものすごいスピードで様々な事態が進行しています。それを考えると、どうも何かただならぬことが起きているようです：」

佐都子 「先週の金曜日？」

ミーナ 「あ、あゆみが来た日だ！」

弥生 「何かありました？変わったことが」



八嶋

「この子…あゆみがこの部屋に来た日なんです。でも…関係、ないと思うなあ。あゆみ、さっきの人達、見覚えあるか？」

あゆみ、首を振る。

ミーナ

「偶然じゃないの。カルトの人だって住むとこ位は必要でしょ」

弥生

「だったらいいんですが…でもくれぐれも気をつけて。彼らは破壊的カルトですから」

ギスケ

「何それ」

弥生

「個人の人格を否定し、教義の刷り込みを行い、反社会的行動を取る宗教のこと。すでに何組もの家族が『最後の方舟』に娘や息子を奪われたと被害届を出しています。教祖は『鳩』と呼ばれる男で、彼の展開する終末論には…」

シズエ

「聞きたくないねそんな話は」

弥生

「え？」

ミーナ

「シズエさん…」

シズエ

「カルトだかナルトだか知らないけど、信じた人間が信じたものを信じてるんだ、それでいいじゃないか。他人のあんたが口を出すこっちゃないじゃろう」

弥生

「で、でも相手はマインドコントロールを行っているんですよ」

シズエ

「やれやれまた横文字かい」

ギスケ

「洗脳です師匠」

弥生

「しつこい勧誘を受け、マインドコントロールされ、やがては人格をも破壊されてしまう…これは一種の暴力です、現代の狂気です！だからこそ私はこうしてペンの力で彼らと戦い…」

シズエ

「…あんた、良い大学出てるだろ」

弥生

「は？」

シズエ

「多少の挫折はあったかもしれないけど、おおかた自分の目指したように生きてる…収入も、社会的地位も」

弥生

「と、突然何を…」

シズエ

「…あんたにやわからない。どんな怪しげな宗教でも、すがらずにはいられない、そんな弱い人間の気持ちなんか。そしてそれがわからなければ…あんたには一生、その『最後の方舟』とやらは倒せないよ」

弥生

「そんなことはありません！私は信者とだって何回も会っているし、現に私だって、私だって…」

シズエ

「頭で考えてもわからないことが、この世には多いんだよお嬢さん。あんたは光さえ与えれば、この世から影は無くなると思ってる

：確かにそれで消える影も多かるう。でもそれが正しいことかどうかは別物さ。影の世界でしか息の出来ない、そんな人間だっているんだよ」

弥生 「そんな…そんな詭弁、誰が信じるのですか！」

シズエ 「信じなくても構わない。言ったらう、信じたい人間が信じたいものを信じればいいってね」

弥生、シズエを睨んでいるが、憤然と立ちあがり。

弥生 「わかりました、今夜はこれで失礼します。でもきつといつかあなた達にもわかるわ。私の警告が正しかったことが」

弥生、飛び出して行く。  
唾然として見送る一同。

ギスケ 「突風のような女だな…」

弥生、戻ってくる。

弥生 「何か起こったら」

ギスケ 「うわ、また来た！」

弥生 「電話頂戴。ケータイでも構わないから」

再び去る。ようやく静かになる舞台。

シズエ 「あれは、イノシシじゃな。前世イノシシ」

ミーナ 「猛進したあげく、崖から落ちたタイプね」

佐都子 「ね、どう思う、彼女の言ったこと」

八嶋 「どうって…」

佐都子 「ホントだとしたら怖くない？隣にそんな人が住んでるなんて…」

八嶋 「でも、追い出すわけにもいかないだろう。誰だって好きなところにすむ権利があるんだからさ」  
佐都子 「そりゃそうだけど…」

あゆみ、大きなあくびをする。

ミーナ 「あゆみ、眠い？」

あゆみ 「うん…」

八嶋 「今布団敷くからな、ちよつと待ってろ」

あゆみ 「ん…」

佐都子 「ちよつと涉ちゃん…」

八嶋 「明日にしよう、サトちゃん。このままじゃあゆみが風邪をひく」

佐都子 「でも…」

八嶋、佐都子に構わずあゆみの世話をやきはじめる。

ギスケ 「俺達も戻ろうぜ」

ミーナ 「そうね」

ギスケ 「ささ、師匠」

シズエ 「歩ける歩ける構わんでエエ」

ミーナ 「じゃーねおやすみ」

八嶋 「おやすみ」

ギスケ、シズエ、ミーナのカタカナチーム去って行く。  
取り残される佐都子。努めて明るく。

佐都子 「…涉ちゃん、あたしさ、今夜は…」

八嶋 「帰る？こんな時間だもんな」

佐都子

「…」

八嶋

「気をつけろよ、駅前の暗いところか。最近この辺も物騒でさ。先月も強盗が〇件。世紀末だね」

佐都子

「…でも送ってくれないんだ…」

八嶋

「ん？なに？」

あゆみ

「ヤシマ、歌ってよ」

八嶋

「また？いい加減卒業しろよ子守唄」

あゆみ

「だって安心するんだもん」

八嶋

「結構こっぴड़ाかしいんだからな、一回だけだぞ」

あゆみ

「早く早く」

八嶋、子守唄を静かに歌う。

聞き入るあゆみ。その二人の姿を見つめる佐都子。

ややあってその場を去る。

歌い終わって八嶋、振り向く。

八嶋

「やっと寝たか…お待たせ送るよサトちゃん。あれ…」

しかし既に佐都子の姿はない。

八嶋

「サトちゃん？」

八嶋の空間、転。

大勢のざわめき声。やがて拍手。舞台上には黒衣の人々。

その輪の中心に鳩が佇んでいる。手には「旧約聖書」。

鳩

「…創世記第9章「節」『そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥にいたるまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。』同じく「節」『わたしは今、いのちの息あるすべての肉

なるものを、天の下から滅ぼすために、地上の大水、大洪水を起こそうとしている。地上の全てのものは死に絶えなければならない。』同じく18節『しかしわたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは、あなたの息子たち、あなたの妻、それにあなたの息子たちの妻といっしょに生き残るようにしなさい。またすべての生き物、すべての肉なるものなから、それぞれ匹ずつ方舟に連れて入り、あなたの陸上生物は滅亡してしまつた。たつた一つ、方舟に乗つたノアの一族を除いては。これが世に言う「ノアの大洪水」です。…皆さんの中には、これをただの伝説と笑い飛ばす方もおられるかもしれない。けれども、私は声を大にして叫びたい。滅亡は近い、第二の大洪水はもうそこまで来ていると。私にはそれがわかる。この目で見るよりも明るくこの手で触れるよりも確かに、破局の到来を感じ取ることが出来る」

聴衆1 「鳩、その破局は回避できないのですか？」

鳩 「できません。何故ならそれは神の意志だからです」

聴衆2 「鳩、ふたたび地上に水が満ちるのですか？」

鳩 「その通りです。陸地は水底に沈み、わずかに残つた土地を巡つて人々は争い、やがて死に絶えるでしょう」

聴衆3 「鳩、どうしたら滅亡から逃れられるのですか？」

鳩 「その答えはたつた一つ：方舟に乗ることです。『最後の方舟』に乗り込むしか、滅亡を逃れる手だてはありません」

聴衆4 「鳩、乗り込む術を教えてください」

「世俗を離れ、財産を捨て、身一つでここに来なさい。そうすればあなたに、私は名前を与えましょう。新しい名前：それは、かつての洪水でノアと共に方舟に乗り込んだ動物の名前です。継ぐべき名前を得たあなたは、やがて新たな種となる：聖なる種、来るべき千年王国を築くための選ばれた種に」

聴衆3 「鳩！」

聴衆2 「鳩！」

聴衆4 「鳩！」

聴衆1 「あなたこそメシアだ、鳩！」

鳩、ゆつくり首を振る。

鳩 「私はメシアではない。メシアは、他にいる。水の脅威から我々をお救いくださるメシア：彼女<sup>3</sup>の息遣いを、私は間近に感じるこ  
とができる…」

聴衆 ♪ 「それでは鳩、あなたは何者なのでしょうか」

鳩 「私は、伝道者…道を伝えるもの」

聴衆 ♪ 「道を伝えるもの…」

鳩 「オリーブの枝をくわえて戻った鳩が新たな大地の存在をノアに告げたように、私の務めは道を照らすこと…人々が道を過たぬように、暗き淵に決して引き込まれぬように…」

拍手。歓声。興奮が鳩を包み込む。

やがてその熱も引いていく。聴衆が去った後にたたずむ牝猫。

牝猫、疲れ果てた様子の鳩にそっと呼びかける。

鳩 「鳩…」

鳩 「(顔を上げ大儀そうに) あなたですか、牝猫」

牝猫 「申し訳ありません、お疲れのところを」

鳩 「構いません。何か変化がありましたか」

牝猫 「え…いえ、あの…」

鳩、無言で答えを促す。

牝猫 「…特には」

鳩 「…」

牝猫 「す、すみません、お忙しいのに、わ、私これで…」

鳩 「待ちなさい。せっかく来てくれたんだ、少し話でもしていきませんか」

牝猫、顔をぱっと輝かせ。

牝猫 「はい！」

鳩 「彼女にはまだこれといって変化はないのだね？」

「はい。見た目はごく普通の女性です。ただ」

「ただ？」

「恐ろしい勢いで賢くなっています。砂地に水が染み込むように、様々なことを学習して、昨日より今日、今日より明日と確実にその様を見ているとまるで…」

「まるで？言ってご覧、怒らないから」

「ヒトを超えようとしている…そんな風に、思えます」

「それは当たり前だ。彼女は我々を救うべきお方なんだから」

「違うんです！そうじゃなくて…なんていうか、彼女は我々とは違う…一緒に存在してはならない別種の生き物…本当なら、決して出会うべきではなかった種族…そんな気がしてならないんです」

「…」

「ご、ごめんなさい！出過ぎたことを言いました。やっぱり私帰ります」

鳩 微笑んで。

「あなたはさつきから、謝ってばかりだよ、牝猫」

「だって…」

「気にすることは無い。たぶん慣れない俗世暮らしで疲れているんだ。そんな時は心の中にサタンが入りこみやすい」

「そうかもしれません。気を引き締めます、サタンに入りこまれないように」

「そうなさい。ところで、牝猫とは上手くやっていますか？」

「え…」

「方舟では二人とも忙しくて、なかなかゆっくりできなかったでしょう。今回は、俗世とはいえ良い機会だ」

「…」

「楽しみにしていますよ、子猫の誕生を」

「鳩、私は…」

「行きなさい。牝猫があなたを待っている」

「…」

「それがあなたの歩むべき道です」

牝猫 「…失礼します…」

去りかける牝猫の後姿に。

鳩 「…蟬に注意なさい」

牝猫 「…」

鳩 「…あなたがたの周りを飛び回っています。ぶんぶんと、相も変わらず、愚かな女だ…」

牝猫 「一礼して去る。」

しばらくの間。やがて。

鳩 「わかっていますよ。そこにいるのでしよう」

舞台上方に、女がいる。

鳩 「高みの見物ですか…いい身分ですね」

女 「…」

鳩 「あなたが何を企んでいるのか、私にはわからないし、知りたいとも思わない。けれどこれだけは言っておきます」

女 「…」

鳩 「…私たちは、滅びない。どんな苦難が待ちうけていようとも、必ず乗り越えて次の千年を迎えてみせる！」

女 「…」

鳩 「…例えそれが、神の意志に反しようとも、ね…」

鳩、女、消える。この空間、転。

別の空間に、佐都子。ぼうつと考え事をしている。

シャーペンの芯を出したり引つ込めたり。カチカチカチカチ。

やって来る榊原。



榊原 「ようやく帰ったんだ、例のご一行」

佐都子 「…」

榊原 「まったく何様だと思ってるんだろ、人のことを馬鹿扱いしやがって」

佐都子 「…」

榊原 「これだからエリートは嫌いだよ」

佐都子 「…」

榊原 「聞いている？三村さん」

覗きこんだ榊原の手の甲に、思いきりシャーペンの芯を突き刺す佐都子。

榊原 「痛ってえ！！」

佐都子 「あ！ごめんなさい！大丈夫ですか」

榊原 「今、ブスっていったよブスって…」

佐都子 「ごめんなさい…考え事してたもんだから」

榊原 「なんか言ってた？あいつら」

首を振る佐都子。

榊原 「そうだよな、外から調べるだけじゃ、わかんないよな」

佐都子 「…」

榊原 「さつき部長が言ってたけど、そのうち水産庁の試験場に移すかもしれないって」

佐都子 「え！」

「しょうがないよね、ここよりは設備、整ってるしさ。だいたいセキュリティだつてなつてないもの、ここ。知ってる？アメリカがすでに噂を聞きつけて、合同調査隊を組織しようって政府に働きかけてるって話？何処の世界にも口の軽いヤツはいるもんだよ全く…」

佐都子 「…」

榊原 「ま、いくらアメリカが噛んだって、わからないもんはわからないと思うけど…生体解剖でもしてみないかぎりは」

佐都子 「榊原さん！」

榊原 「やだなジョークジョーク」

佐都子 「ジョークにしたってあまりにも酷いです。毎日あの子の世話をしている私の気持ちにもなってください」

榊原 「ゴメンゴメン、ついうっかり」

佐都子 「今度言ったら、許しませんよ」

榊原 「おーこわ。なんだかイライラしてるねえ…上手く行っていないの、八嶋君と」

佐都子 「どうしてその話に…」

榊原 「避けてるでしょ、彼のこと。館内で会っても目も合わそうとしないし」

佐都子 「そんなことないですよ」

榊原 「別にいいよ隠さなくても。気持ちわかるもの、三村さんの」

佐都子 「…」

榊原 「いい歳して定職にも就かず、フラフラしてさ…甘えんなって感じだよね、うん」

佐都子 「それは関係無いです、全然」

榊原 「そうなの？じゃあ何が原因なの」

佐都子 「…」

榊原 「話してよ。僕で良かったら相談に乗るよ」

佐都子 「…」

榊原、ゆつくりと佐都子の背後へ。

榊原 「…不思議だと思わなかった？僕が、なんでこんなに三村さんのことに詳しいのか」

佐都子 「観察してるんですか、水槽のマグロみたいに…」

榊原 「茶化さないですよ。気がついてるんだろう、僕がずっと君を、見てるってこと」

佐都子 「…」

榊原 「ね、三村さん。僕は君のことを…」

佐都子 「あー！！」

大声を上げ、いきなり立ちあがる佐都子。

榊原 「な、何!? どうしたの!」

佐都子 「大変! 水槽のポンプ止めたままだわ。ちょっと見てきますね」

榊原 「え、でも僕が見たときにはちゃんと…」

佐都子 「…榊原さん」

榊原 「ん?」

佐都子 「観察するのは得意でも、されるのは好きじゃないです、あたし」

榊原 「ちよつと三村さん…」

佐都子、隣の部屋に飛び込みドアを閉める。榊原、苦々しそうにそのドアを見つめながら。

榊原 「…鯨にポンプか…神様も妙なことを思いつくもんだ…」

榊原、手の甲をさすりながら消える。ドアに背を預け、声を押し殺して泣く佐都子。その佐都子を優しく包むように、青い光が満ちている。気泡の音。モーターのうなり声。巨大な水槽…ここは眠りつつづける「鯨の胎児」の部屋。

佐都子 「…ごめんね、こんなところで泣いて。もうここしか無いから、あたしの居場所…」

佐都子、そつと水槽に手を這わせる。

佐都子 「…ずうっと眠ったまんまだね、お前…起きたくないの? そんなにこの世界で生きていくのが嫌なの?」

佐都子、水槽にもたれかかり。

佐都子 「その方がいいかもしれない。起きないで、ずっとずっとこのまま、永遠に夢の中…そうしたらお前は選ばなくて済む。どちらの世

界で生きていくのか、選ばなくて済むよ……」

部屋中に、くぐもった咆哮が聞こえる。

佐都子微笑して。

佐都子

「やだ、あくび？体が大きいからあくびも大きいねえ……。ね、あたし昔から不思議だったの。なんでお前たちの祖先は、海に帰ったんだろう。海の中だけでは生きられないのに。そして陸に打ち上げられたら……。死んでしまうのに。どっちつかずだよねえ。中途半端っていうかさ……。きつと今までに1頭くらいいたよね、死ぬ間際に後悔したヤツ。自分の重みでゆっくりと海底に沈みながら……。アーナンデオレハウミニナンゾカエツチャツタンダロー。オカヘアガツテイレバコンナコトニハナラナカッタノニ。スクナクトモ……。スクナクトモサイゴニクウキラムネイッパイスイウコトガデキタノニナア……」

再び、くぐもった咆哮が聞こえる。

佐都子

「……笑ってるの？楽しい夢でも見てるのかな……」

佐都子の空間、転。

笑い声聞こえる。同時に、ラジオ。英語の番組がかかっている。ミーナとあゆみ。

あゆみ、笑いながらラジオを聞いている。ミーナ、ねっころがって雑誌を読みながら。

ミーナ

「ねえ、つまんないよ。変えてよ」

あゆみ

「んー(またジョークに大笑いする)」

ミーナ

「わっかんないんだから、何言ってるか。ねえ」

あゆみ、夢中で聞こえていない。

ミーナ、立って行って変える。ラジオからは「高嶋ひでたけの中年探偵団」だかなんだかが流れる。

あゆみ

「なんで変えちゃうの。面白いのに」

ミーナ 「英語、わかんないんだよ」

あゆみ 「じゃ、覚えれば」

ミーナ 「簡単に言わないでよ。あんたとは違うの」

あゆみ 「英語、覚えやすいよ。ロシア語に比べれば」

ミーナ 「ロシア語！マスターしたの？」

あゆみ 「まだ半分くらい。あんまりいい教材が無くて」

ミーナ 「…よく言ったもんだよ。気違いと天才は紙一重…」

あゆみ、伸びをしながら。

あゆみ 「つまらないな…」

ミーナ 「外に出てみる？」

あゆみ、大きく首を振る。

ミーナ 「怖いのか？」

あゆみ、小さく頷く。

ミーナ 「そう。…せめてテレビでもあればねえ…」

あゆみ 「テレビ」

ミーナ 「四角くてね、色んな絵が、こう…」

あゆみ 「テレビジョン。実景などをそのまま電波で遠くに送って映写する装置のこと」

ミーナ 「その通り。よくご存知で」  
あゆみ 「でもどんなものだから、実感がわからない。本で読んだだけだから…そういうの、多いんだ。パイヤとかはしかとかカニクイザルとか」

ミーナ 「あゝカニクイザル…」

あゆみ 「砂漠とか地縛霊とか熱海秘宝館とか」

ミーナ 「くうー秘宝館…」

あゆみ 「オンドルとか外反母趾とか…セックスとか」

ミーナ 「おう、セックス…」

あゆみ 「…ねえミーナさん」

ミーナ 「ん？」

あゆみ 「セックスって、いいの？」

ミーナ 「いいよう。好きな男となら」

あゆみ 「好きじゃない人だったら？」

ミーナ 「金をもらえば仕事。じゃなきゃボランティア」

あゆみ 「ボランティア…」

ミーナ 「あんた、興味あるのセックスに」

あゆみ 「別に。だって単なる生殖行為でしょ」

ミーナ 「じゃ、なんでコンドームなんてものがあるのさ、この世には」

あゆみ 「それは…なんでだろう」

考え込むあゆみ。その姿を横目で見ながら。

ミーナ 「セックスする時、人間にあって動物には無いもの、何だと思う？」

あゆみ 「知能？」

ミーナ 「(首を振って)『気持ち』」

あゆみ 「…『気持ち』」

ミーナ 「そ。哀れみだの自己満足だの打算だの愛だの……することは一緒でも、底に流れてる気持ちは、人によって全然違う。100のセックスに100の気持ち。1000のセックスに1000の」

あゆみ 「気持ち…」

ミーナ 「…こればかりは、いくら本を読んでも理解できないだろうなあ」

あゆみ 「…」

ミーナ 「ま、そのうちあんたにもわかるよ。焦らない、焦らない…お」

ミーナのケータイが鳴り出す。

ミーナ 「ハイ、ミーナです。…ええそう、お電話ありがとうございます。え、歳？19ですう」

あゆみ 「ミーナさん…」

ミーナ 「(シツと言う真似をして) ホントですつてばあ。今はね〜ん〜バイトのベビーシッター中…ああ、だいじよだいじよぶ、もう大

さい子だから放つとしても。…はあい、じゃ8分後に浦安の北口ね。え？目印？…ダイナマイトなバデイかしら、16にしては。ほほ。じゃ」

ミーナ、ケータイを切り、立ちあがる。手早く化粧を直しながら。

あゆみ 「出かけるの？」

ミーナ 「うん。営業してくるわ」

あゆみ 「お店？」

ミーナ 「(首を振り) ソープは閉まったまんま。ったく、いまましいよ、この天気…。とはいえ、でかいガキが一匹住み着いちやったからさ、自力で稼がないと…あと少して八嶋帰ってくるから、大丈夫だよな？」

頷くあゆみ。

ミーナ 「帰りは10時くらいになるってギスケに言っついて。豚汁、鍋に作ってあるからお腹空いたらそれ食べてね。腐らないようにたま

に火、かけて。それから、もうすぐ取水時間だから、忘れずにちゃんと水、溜めといてね。じゃ行ってきます」

あゆみ 「ミーナさん！」

ミーナ 「ん？」

あゆみ 「…綺麗だよ、とても」

ミーナ、にこっと笑う。

ミーナ 「たんまり稼ぐぜえ〜おしやあ！」  
あゆみ 「おしやあ！」  
二人 「おしやあ！！」

ミーナ、去る。  
一人残るあゆみ。

あゆみ 「：セックス：義務と権利：生殖の意味：種の多様化：気持ち：ミーナさんの気持ちギスケさんの気持ちシズエさんの気持ち佐都子さんの気持ちヤシマの気持ち：あたしの、気持ち：」  
目覚ましの音。

あゆみ 「いけない、時間だ！」

蛇口をひねり、あわててバケツに水を溜めるあゆみ。ぼんやりと水を眺めながら。

あゆみ 「水：水の気持ち？」

ギスケ、帰って来る。

ギスケ 「ただいまっ。あれあゆみちゃん一人？ミーナは？」  
あゆみ 「仕事に行った。10時くらいには戻るって」  
ギスケ 「あっそ。：ああ、いいよ俺やるよ」  
あゆみ 「ありがとう」

ギスケ、あゆみに代わり、重たいバケツを運ぶ。  
鼻歌交じりに水を溜めていくギスケ。その後姿を見ながらあゆみ。



あゆみ 「…ねえギスケさん」  
ギスケ 「んー？」  
あゆみ 「セックス、してみませんか？」  
ギスケ 「…誰と？」  
あゆみ 「あたしと」

飲んでいた水に咳き込むギスケ。

あゆみ 「…駄目ですか、やっぱり」  
ギスケ 「い、いいいや、だ、駄目っていうかその」  
あゆみ 「水」  
ギスケ 「へ？」  
あゆみ 「水、もういっぱい。バケツ、取り替えないと」  
ギスケ 「あ、あそうかそうね」

あゆみ、立って代わりにバケツを運ぶ。

ギスケ 「からかっているの？なんかの冗談？」  
あゆみ 「違います。本気ですあたし」  
ギスケ 「でも何で急に、しかも俺と…」

言いかけたギスケにキスをするあゆみ。水音が響く。

ギスケ 「…いいの、ホントに？」

頷くあゆみ。ゆっくり横たわる二人。

あゆみ 「水、止めなくちゃ…」  
ギスケ 「構うもんか…」

水音だけが響く、間。やがて。

八嶋 「ただいま。おいおい水、出しっぱなし…」

離れる二人。気配に気付く八嶋。

八嶋 「ギスケ、ミーナ！お前からまた人の部屋で…」

言葉が続かない八嶋。

八嶋 「…あゆみ…」

あゆみ 「お帰りヤシマ」

八嶋 「…お前…どうして…」

ギスケ 「いやあのこれはだな、その…」

八嶋 「…」

ギスケ 「色々深い訳があつてだな、この…」

八嶋 「…」

ギスケ 「あ、俺、そういえば用事があつたんだ、今思い出した。じゃ、またな！」

あゆみ 「ギスケさん」

そそくさと逃げ出すギスケ。  
間。

あゆみ 「…ヤシマ？」

爆発する八嶋。物を蹴りつけ、壁を叩く。

八嶋 「何でだよ！なんでこんなことするんだよ！！」

あゆみ 「ヤシマ！…止めてヤシマ！」

八嶋 「なんでだよ！なんで、なんで！」

八嶋、あゆみを掴む。

八嶋 「あゆみ、お前…お前…畜生…」

あゆみ 「…どうして怒るの？あたし何かいけないことした？」

八嶋 「…」

あゆみ 「ギスケさんとセックスするの、いけないことだった？だったら、ごめん。もうしないから、怒らないでヤシマ」

八嶋 「…」

あゆみ 「ごめん、ごめんね…」

八嶋、部屋を飛び出す。

あゆみ 「何処行くの、ヤシマ！」

答えはない。再び一人きりになるあゆみ。

あゆみ

「…わからないこと。どうして三毛猫には雄が少ないのか。どうして吸血鬼には銀の弾なのか。宇宙の始まりは、そして終わりは何？ ヒトゲノム解析のもたらすもの。どうして叶姉妹はあんなにゴージャスなのか、誰がお金をだしているのか。地球規模の貧困と病苦。なぜ民族紛争は起こるのか。富が偏在することの意味。人々の憎しみ、怒り、悲しみ…それでも生きていけるのは何故？海が青いのは何故、雲が白いのは何故、風が止まないのは何故、ヤシマが…ヤシマが怒るのは何故？そして…」

あゆみ 「…私は誰？ここに居るのは、何故…」

あゆみの空間、転。

別空間に八嶋。ぼうっと佇んでいる。背後からそっと近づくギスケ。

ギスケ 「よ…よう」

八嶋 「…」

ギスケ 「さつきは、その…ごめんな」

八嶋 「…」

ギスケ 「あのでも最後まで行っていないから、入れる前だったから、マジで…」

八嶋 「お前が謝ることないよ。…俺の方こそごめん。気を利かせて出て行けばよかった」

ギスケ 「いや別にそんな」

八嶋 「…考えてみれば、俺にはあゆみとお前のこと、止める資格なんてないんだよな。俺はあゆみの恋人でもなんでもないし…あゆみが  
お前のことを好きならそれは」

ギスケ 「違うって！あゆみちゃんがああいうことをしたかったのは…なんていうか、純粹に好奇心からっていうか…」

八嶋 「じゃ、男なら誰だっていいのか？」

ギスケ 「誰だってということはないだろうけど、でもまあ知り合いなら…」

八嶋 「…だけど俺じゃなくお前…」

ギスケ 「え？」

八嶋 「あ、いや、何でもない。何言ってるんだらうな俺」

ギスケ 「…」

八嶋 「…最近、ちょっと疲れてて。佐都子も忙しいみたいであんまり会えないし」

ギスケ 「…」

八嶋 「だから少しいらしてただけなんだ。…気、使わせて悪かったな」

ギスケ 「…お前さ、そうやって何でも自分の中にためこむの、やめろよ」

八嶋 「…」

ギスケ 「いつかパンクするぜ。パーンって」

八嶋 「したよ、もう」

ギスケ 「…」

八嶋 「だから会社、行けなくなった」

ギスケ 「…」

八嶋 「…やっぱりあゆみ、警察に連れて行くべきかな」

ギスケ 「なんだよ急に」

八嶋 「あゆみはどんどん賢くなっている。天才といってもいいくらいだ。でも俺に出来ることは何もない。本だって買ってやれないし、ましてや学校になんか通わせられない。だったら警察に預けてしかるべき所で生活した方がいい。俺といたって良いことなんか一つもない。…俺があいつにしてやれることは、もう何もないんだ…」

ギスケ 「渉」

振り向いた八嶋をギスケ、殴り飛ばす。

ギスケ 「バーカ！」

八嶋 「いってえ…」

ギスケ 「お前、ほんつとバーカだ！」

八嶋 「…」

ギスケ 「真面目で正直なら何でも許されると思ったら大間違いだ。本当に人を傷つけるのはな、悪意なんかじゃない。誠意や善意だ！そしてその後ろにある自己満足だ！」

八嶋 「俺は、そんなつもりじゃ…」

ギスケ 「じゃどんなつもりだ。お前、あの子がああの部屋を出て行きたがっていると、本気で思うのか」

八嶋 「…それは…」

ギスケ 「…何でもかんでも背負おうなんて思うな。俺やお前がいなくなったら、地球はちゃんと回ってる」

八嶋 「…」

ギスケ 「少しは、不真面目になれよ。でなきや…生きていけねえぞ」

八嶋 「…不真面目になるのって、意外と難しいよな」

ギスケ 「その通りだ。俺なんか日々涙ながらに努力してる」

八嶋 「お前が言うと、説得力無いな」

ギスケ 「余計なお世話だ」

八嶋 「ギスケ」

振り向いたギスケを八嶋、殴り飛ばす。

八嶋 「今の、あゆみに悪さしたお仕置きね」

ギスケ 「ニコニコしながら殴るなよ、気持ちわりい…」

八嶋 「え、ニコニコしてる？俺」

ギスケ 「してるよ。もう満面の笑みだよ」

八嶋 「そうか。人間、自分に素直に生きるのは大事なんだな、ギスケ」

ギスケ 「う、うんまあ」

八嶋 「俺、これからどんどん素直になるよギスケ」

ギスケ 「…まずいコト教えちゃったかな、俺…」

二人、去る。同時に出てくる牝猫。あとを尾けようとする。そこに弥生。

弥生 「こそこそ嗅ぎまわるの、お上手ね。さすが牝猫さん」

牝猫、無視して行くこうとする。

弥生、その手を掴む。

弥生 「待つてよ。少しくらいしゃべってくれたっていいじゃない。お互い、知らない仲でもないんだし」

牝猫 「あなたと話すことは何もありません」

弥生 「ねえ、何であるの？アパートに越して来たの？八嶋さんの何が狙いなの？鳩はいつたい何を企んでるの？」

牝猫 「…別に何も。新居を決めた場所がたまたまあそこだっただけです」

弥生 「嘘ばかり。あんなに嫌ってた。牡猫と自分から一緒に住むわけ、ないじゃない」

牡猫、火のような目で弥生を睨む。

弥生 「可哀想な話よね。好きでもない男と結婚させられて。それも鳩の一存でさあ」

牡猫 「私を挑発しても無駄ですよ」

弥生 「そんなつもりないわよ。純粹に可哀想だっと思ってただけ」

牡猫 「可哀想？それはあなたの方です、都築さん」

弥生 「私が？どうして」

牡猫 「信じるべき対象を見失い、サタンに惑わされ、権力の手先となって弱い者を弾圧する…しかも哀れなことに」

弥生 「哀れなことに？」

牡猫 「…それを『正義』だと信じている」

弥生 「当たり前よ！鳩にだまされた人達や、その家族を救うことのどこが悪いって言うの！」

牡猫 「都築さん。あなたの行動は、正義ではない。それはただの私怨…鳩に対する個人的な恨みです」

弥生 「…なんですって」

牡猫 「あなたはそれに気付いている…でも認めたくないだけ」

弥生 「…」

牡猫 「失礼」

立ち去ろうとする牡猫。その背中に弥生。

弥生 「鳩に言いなさい！いつか必ず、あなたの化けの皮を剥がしてやるって！」

牡猫 「…鳩があなたをなんて呼んでいるか、ご存知ですか？」

弥生 「…」

牡猫 「蠅。ぴったりだと思いませんか？…あなたは飛びつづける、汚れた旧世界を。そして、清らかな次の千年に…あなたの居場所は

無い」

牝猫、去る。そのあとを見つめながら弥生不敵に笑う。

弥生 「蠅か…上等上等。羽があつて鼻が利けば…どこまでも、食いついていける」

弥生も去る。この空間、転。

蝉の鳴き声、大きく。伸びているギスケ、八嶋、そしてあゆみ。

ギスケ 「あちー…クーラーくらい買えよ」

八嶋 「ないよ、そんな金」

ギスケ 「蝉、うるさい…」

八嶋 「逃げないんだよ、この部屋から」

ギスケ 「殺すか」

ギスケ、新聞紙を丸めて持つ。

あゆみ 「止めて、可哀想だよ」

八嶋 「どうせ10日間の命だぜ」

ギスケ 「ハイハイ…しっかしいつまで続くのかね、この天気。元気なのは蝉くらい…」

八嶋 「陸には、一切雨が降らないんだろ」

あゆみ 「そう。全ての水の循環は海で閉じているの」

ギスケ 「どういうこと？」

「海から蒸発した水は、普通雲になって陸にも雨を運ぶんだけど、ここ最近雨は海にしか降らないの。だから海、雲、また海の線り返し。陸には一滴の雨も降らない…」

ギスケ 「嫌がらせみたいだな」

八嶋 「誰の」

ギスケ 「神様じゃないの」

八嶋 「なんで神様がいじわるするんだよ」



ギスケ 「知らねえ。おおかた、怒らせたんだろう。環境破壊に、人口爆発。動物虐待に」  
あゆみ 「…進化の誤算」

八嶋 「え？」

あゆみ 「ううん、何でもない」

ギスケ 「あちー…なんか飲むもんじゃない？」

あゆみ・八嶋 「あ、じゃあ麦茶…」

ギスケ 「…」

あゆみ・八嶋 「取ってくるよ、あたし（俺）」

ギスケ 「…」

二人、口を開きかけ。

八嶋 「…じゃあ、頼む。俺の分も」

あゆみ 「…うん」

あゆみ、いったん去る。

ギスケ 「…まだ、仲直りしてないの」

八嶋 「いや、そういうんじゃないよ…」

ギスケ 「じゃ、どういんだよ」

八嶋 「…」

ギスケ 「まさかお前…」

そこに、すごい音。階上で物が砕けたり、喚いたりする声。

八嶋、ギスケ、見上げる。戻ってきたあゆみも一緒に。

八嶋 「派手だな…」

ギスケ 「…うん」  
シズエの声 「喝！」

ドアの閉まる音。車のエンジン音。ややあってドアが開く。立っているのはシズエ。

シズエ 「邪魔するよ」  
八嶋 「いらっしやい…」

シズエ、上がりこみ、タバコに火をつけようとする。が、ライターがなかなか点かない。すかさずギスケ、火をつける。

シズエ 「ありがとうよ」

シズエ、上手そうに一服する。

あゆみ 「シズエさん、今の…」  
シズエ 「ん？ああ悪かったね、大騒ぎしてさ」  
あゆみ 「お客？暴れたの？」  
シズエ 「(笑って) 違うよ。半年に一遍来る、疫病神さ」  
あゆみ 「疫病神？何、それ」  
八嶋 「ところで、ギスケ、ミーナさんどうしたんだ今日は」  
ギスケ 「午前中に一件電話があつてさ、仕事入ったって出かけて行った」  
八嶋 「午前中から…」  
シズエ 「ええのう、若いもんは」  
あゆみ 「それより疫病神…」

そこへ酔っ払ったミーナを担いだ「牝猫」と「牝猫」。

ミーナ 「たっらいまあ！ミーナさん、帰りましたあ！」

八嶋 「ミーナ！」

ギスケ 「ああ、もう…」

≡牝猫≡ 「こんにちは」

シズエ 「どうしたんだね」

≡牝猫≡ 「それが…私たちが駅前を通りかかったとき、ちょうどその、男性の方と…口論、されていて…」

八嶋 「口論？」

ミーナ 「だあつて、やることやった後で『金は払わない』なんて言い出すんだもん、信じらんない！」

あゆみ 「それでミーナさん…」

八嶋 「喧嘩したのか？素性のしれない男相手に？」

ミーナ 「もっしろん！」

ギスケ 「馬鹿か手前！殺されたかもしれないんだぞ！」

ミーナ 「馬鹿とは何よ、馬鹿とは！当然の権利でしょうが！」

ギスケ 「殺されちまつたら元も子もねえだろうが！」

ミーナ 「えらそうなこと言う前に稼いできたらどうだ、能無し！！」

ギスケ 「何だとオ…」

シズエ 「まあまあ」

八嶋 「落ち着いて落ち着いて」

あゆみ 「それで？」

≡牝猫≡ 「ええ…見るに見かねて割って入って…その場は何とか収まったんですが、その、ミーナさんが…」

あゆみ 「ミーナさんが？」

≡牝猫≡ 「むかつくから、一杯付き合えと。で、私達も時間に余裕があったものですから、まあ一杯くらいなら構わないかと。そうしたら…」

全員、大駢をかくミーナを見つめる間。

八嶋

「…こう、なっちゃったんですねえ」

≡牝猫≡ 「：こう、なつちやいました」  
ギスケ 「えらい、すんませんでした」

≡牝猫≡ 「いえ、こちらこそ」

≡牝猫≡ 「じゃあ、私達はこれで」

八嶋 「あの、良かったらお茶でも飲んで行きませんか」

≡牝猫≡ 「え？いやしかし」

シズエ 「どうぞどうぞ」

ギスケ 「狭くて汚いところですけど」

八嶋 「お前が言うなよ」

≡牝猫≡と≡牝猫≡、目を見合わせる。

≡牝猫≡ 「：それじゃあ」

≡牝猫≡ 「お言葉に甘えて」

上がりこむ二人。目は、あゆみの一挙手一投足に注がれている。

あゆみ 「麦茶」

≡牝猫≡ 「は？」

あゆみ 「麦茶で、いいですか」

≡牝猫≡ 「え、ええ」

≡牝猫≡ 「それは、もう：」

あゆみ、去る。ほっと肩の力を抜く二人。

八嶋 「：あのう」

二人 「はい？」

八嶋 「そんなに興味深いですか、あの子」

≡牝猫≡ 「い、いえ別に」

≡牝猫≡ 「何故ですか？」

八嶋 「いやなんか…穴の空くほど見つめてらしたから、どうしたのかなって」

慌てる二人。

≡牝猫≡ 「いやあ、実にそのう…か、可愛らしいお嬢さんだなあって。なあお前」

≡牝猫≡ 「そうねあなた」

八嶋 「そんな。普通ですよ」

ギスケ 「そうそう、十人並」

八嶋 「だからお前が言うなって」

あゆみ 「失礼します」

あゆみ、二人に麦茶を配る。気まずい間。みな、意味の無い動作を繰り返す。気まずさが極限に達した時。

シズエ 「…甘鯛…」

全 「は？」

シズエ 「甘鯛については、どう思われますかな奥さん」

≡牝猫≡ 「え？…あのすみません」

八嶋 「はい」

≡牝猫≡ 「禅問答か何かですかこれは」

ギスケ 「禅問答というより前世問答…」

≡牝猫≡ 「はい？」

八嶋 「とにかく、思ったままを言って見て下さい」

≡牝猫≡ 「甘鯛…」

シズエ 「そう、甘鯛…」

「牝猫…魚は…全般的に好きじゃないです。特に」  
シズエ 「特に？」

「牝猫…活け造り。鳥肌が立ちます」

シズエ 「うんうん」

ギスケ 「(ひそひそと) お師匠、満足そうだぞ」

八嶋 「ビジョンが一致したんじゃないか」

あゆみ 「じゃあやっぱり前世、甘鯛で」

ギスケ 「最後は、活け造りと見た」

八嶋 「伊豆かな」

ギスケ 「沼津辺りだろう」

あゆみ 「それで団体の」

八嶋 「おっさんたちに」

ギスケ 「ピチピチした柔肌を…」

∞人 「合掌」

「牝猫…な、なんですか」

シズエ 「次にトロ鰹！トロ鰹についてはどんな意見をお持ちかなご主人」

「牝猫…う…うまいな、と」

シズエ 「うまい？」

「牝猫…はあ…特に初夏から」

シズエ 「初夏から？」

「牝猫…秋口にかけての近海もの。鳥肌が立ちます」

シズエ 「喝！」

腰を抜かす「牝猫」。

ギスケ

八嶋

「(ひそひそと) お師匠、ご立腹だぞ」

「ビジョンの不一致か」

あゆみ 「前世トロ鯉のくせに」

ギスケ 「好物もトロ鯉」

八嶋 「共食いか」

ギスケ 「トロトロだな」

あゆみ 「血管もトロトロ」

八嶋 「にじみ出る脂で」

ギスケ 「ワオ！アブラギツシュ！」

∞人 「合掌」

≡牡猫≡ 「な、なんですかあなた方はさつきからこそこそと…」

≡牝猫≡ 「私達に話せない訳でも？」

八嶋 「普通、話せないよなあ」

ギスケ 「脂性は前世のせいなんてなあ」

≡牡猫≡ 「と、ところで皆さん、今なにか悩んでいることはありませんか」

八嶋 「悩み？」

ギスケ 「そりやもう。金がない、仕事がない、メジャーになれない…」

≡牝猫≡ 「社会的な悩みですね」

≡牡猫≡ 「あゆみさんは？」

あゆみ 「…あります。数え切れないほど」

≡牝猫≡ 「例えば？」

あゆみ 「…何のために、今自分がこうして生きているか、わからない…」

八嶋 「あゆみ…」

≡牡猫≡≡牝猫≡、大きく頷く。

≡牡猫≡ 「わかります、わかりますその気持ち」

≡牝猫≡ 「少し前の私達がまさにそうでした」

≡牡猫≡ 「人は誰しも、そうやって悩み、苦しみます」

「牝猫」 「でも、必ずその苦しみから抜け出る方法はある」

あゆみ 「そうでしょうか…」

「牝猫」 「実は私達、ちよつとした聖書の勉強会のようなものをやってまして…」

「牝猫」 「あら！そういえばこのすぐ近くにも、教室があるんじゃないかかったかしら？」

「牝猫」 「すごい偶然だなお前！」

「牝猫」 「そうねあなた！」

「牝猫」 「あ、そうだ。もし良かったら、これから行って見ませんか、あゆみさん」

あゆみ 「でもあたし…」

「牝猫」 「あなたの後ろには、深くて暗い何かがある」

「牝猫」 「このままでは、呑み込まれてしまいますよ」

シズエ 「ほほう…」

ギスケ 「師匠、何感心してるんすか」

シズエ 「いや、彼らにも見えるのかのう、と」

「牝猫」 「取り返しのつかなくなる前に」

「牝猫」 「さあ。さあ。さあさあさあさあ」

そこへ。

弥生 「行っちゃ駄目よ」

ミーナ 「あ、イノシシ！」

弥生 「それこそ、取り返しのつかないことになるわ」

「牝猫」 「蠅め…」

弥生 「イノシシでも蠅でもありません。この間はどうも、牝猫さん」

「牝猫」 「…」

「牝猫」 「何しに来た！」

弥生 「何しにこようが私の勝手。気をつけたほうがいいわよ、日吉荘のみなさん。親切なふりをして人の心につけこむのが『最後の方舟』の常套手段だから」



「牡猫」 「し、失敬な。何か証拠でも…」

弥生 「さつき金を取り損ねた相手、浅黒い大柄な男がかすかに大阪弁が入ってたでしょうミーナさん」

ミーナ 「そうそう。精力絶倫で〇回もやるときながら金払わないんだよ」

弥生 「それは信者の一人で森という男。ホーリーネームはオットセイ…」

八嶋 「オットセイ…」

ギスケ 「ベタなホーリーネームだな…」

弥生 「ミーナさんと別れた後、教団施設に入っていくのをちやあんと確認したわ」

ギスケ 「じゃ、口論になったのを見かけたのは偶然じゃなくて」

弥生 「すべて仕組まれたこと…この部屋に公然と侵入するためのね」

「牡猫」 「い、いい加減なことを言うな！」

「牡猫」 「私達の善意をそのように歪めて…」

ゆらりと立ちあがるミーナ。目がすわっている。

ミーナ 「…金、払え…」

「牡猫」 「し、しかし…」

ミーナ 「払えって言ってるんだ、オットセイ！」

ミーナ、牡猫に飛びかかって行く。慌てる人々。

ギスケ 「ミーナ！」

八嶋 「止せよ！」

止めようとする二人の横で勝ち誇る弥生。

弥生 「姑息なコト考えるからこんなことになるのよ、牡猫さん」

牝猫「……」  
弥生「いい気味……鳩にぜひ見せてやりたいわね。そう思わない？」

牝猫「弥生の頬を思いきり引っぱたく。」

弥生「なにすんのよっ！」

牝猫「……サタンが……」

弥生「え？」

牝猫「サタンが鳩の名を口にするんじゃないわよっ！！」

牝猫「弥生に飛びかかって行く。弥生も負けじと組み付き返す。」

シズエ「これ止めんか、みっともない」

弥生「ババアはすっこんでな！」

シズエ「ババアじゃと……」

弥生「怪しい占いやりやがって、こいつらと一緒にインチキババア！」

シズエ「よ、よくも愚弄しおったな……」

シズエも乱闘に入っていく。滅茶苦茶になる舞台。呆然としているあゆみ。

そこに一際高く蝉の声。見上げるあゆみ。蝉の声、一瞬途切れ、バケツの中にぽちんと落ちる音がする。蝉のあがく羽音。弱弱しい鳴き声。

あゆみ「蝉が……」

誰も気にも留めない。

あゆみ「蝉が死んじゃうよヤシマ……」

誰も気にも留めない。

あゆみ、恐る恐るバケツに手を入れる。

あゆみ 「どうしよう…苦しいの、お前…」

蝉の声、どんどん弱くなって行く。

あゆみ 「生きていたいかい、水の中でも…」

音楽！光！

蝉の声、あかく羽音消え、代わりにゆるやかに水を掻く音。声も無くバケツを覗き込むあゆみ。シズエが、次に牝猫が動きを止める。

シズエ 「…開けたんだね、扉を…」

あゆみ 「どうしよう…どうしようシズエさん…」

シズエ 「怖がらんでええ。お前さんは何にも悪いことはしちやいないよ」

あゆみ、シズエの胸に顔をうずめる。

牝猫 「…奇蹟が…起こったのね何か、今…」

弥生 「はあ？」

牝猫 「感じた…確かに、莫大なエネルギーを…」

弥生 「また奇蹟ごっこ？戯言もい加減にしな！」

牝猫 「見せて、そのバケツの中を」

シズエ 「…そつとしといておくれ」

≡牝猫≡ 「お願いです私達に希望を、メシア！」  
シズエ 「メシア？」  
ギスケ 「救世主のことです師匠！」

シズエ、ゆっくり首を振る。

シズエ 「この子は、そんなもんじゃない…」  
≡牝猫≡ 「…」  
シズエ 「気持ちに運命に追いつかない、可哀想な子どもさ…」  
≡牝猫≡ 「…」

≡牝猫≡とシズエ、しばし睨み合う間。  
≡牝猫≡、駆け去る。慌ててそのあとを追いかける≡牝猫≡。

≡牝猫≡ 「待てよ、おい！」  
弥生 「鈴でもつけとけば？あのどら猫に」

≡牝猫≡、唾棄し、去る。  
急速に静けさが戻る舞台。

ミーナ 「どうしちゃったのよ急に…」  
ギスケ 「わからん。バケツがどうか」  
八嶋 「バケツ？」  
シズエ 「何でもないよ。やれやれ、大変な一日だったよ今日は」  
ミーナ 「全くよ。金は稼げない、喧嘩は始まる…」  
ギスケ 「俺なんか、ふるいたくもない暴力ふるっちゃったよ久々に」  
八嶋 「その割には一番イキイキしてたぞお前」

ギスケ 「そう？」  
ミーナ 「それもこれもみーんな…」  
あゆみ 「疫病神のせい？」

間。

ミーナ 「え？」  
あゆみ 「さっき言ってたじゃないシズエさん、疫病神が来たって。疫病神ってそういうものなんでしょ？災いを運んでくる…」  
弥生 「そんなものが来たの？」  
あゆみ 「うん。ね、シズエさん」  
シズエ 「さてと、あたしや疲れたからそろそろ失礼するよ。…このバケツの水、もらってってもいいかい？」  
八嶋 「ああ、どうぞ」  
あゆみ 「それ…」  
シズエ 「…近所の川に、流して来るよ」  
弥生 「ねえちよつと疫病神って!？」

シズエ、バケツを下げて去る。

弥生 「無視すんなよクソババア…」  
あゆみ 「どうしたんだろう、シズエさん元氣ない」  
ミーナ 「…あんたのせいよ」  
あゆみ 「あたし？」  
ミーナ 「疫病神疫病神って…シズエさんの気持ちも考えなさいよ」  
八嶋 「やめろよミーナ」  
ギスケ 「あゆみちゃんは、何も知らないんだから」  
ミーナ 「知らなけりや何やっても許されるってもんじゃないでしょう!？」  
あゆみ 「どういうこと、ヤシマ？」

八嶋 「シズエさんが言ってた疫病神って言うのは…実の息子さんなんだ」

あゆみ 「シズエさん生涯独身だって…」

ギスケ 「それは商売上の嘘。本当は結婚して息子が一人いる。旦那さんが早くになくなって、その後女手一つで育て上げたそうだ」

あゆみ 「その息子さんはどうして疫病神に…」

八嶋 「シズエさん、お嫁さんと上手く行っていないらしいんだ。初めは同居していたけど、シズエさんが前世占いとか始めて、それで関係がこじれたらしい。で、険悪な家にいるよりはっていうんでこのアパートに越してきて…」

あゆみ 「…」

ギスケ 「その息子さんが訪ねてくるのが半年に一遍。同居を勧めにね。でもシズエさんにはわかっているのさ。それが形ばかりだってこと。本当は同居なんかしたくないのに、しょうがなく機嫌伺いに来てるってこと」

あゆみ 「どうしてそんな…」

ミーナ 「決まってるだろう、遺産相続のためさ」

あゆみ 「…」

ミーナ 「ここで縁を切られたら、手に入るはずの土地が入らなくなる。それで仕方なく半年に一遍…わかったかい？これが疫病神の正体」

あゆみ 「知らなかった…シズエさんにそんな過去があったなんて…」

ミーナ 「過去？過去なんて誰にでもあるのさ…アンタ以外は」

ギスケ 「ミーナ！！」

「もうたくさん！何でも知ってるって、あたしはあんたたちとは違うのよって顔して！！確かにあんたは天才かもしれない、でもねいくら頭が良くて、他人の痛みがわからなけりゃ、そんなの何の役にもたちやしない！」

あゆみ 「止せミーナ」

あゆみ 「あたしは…あたしはそんな…」

ミーナ 「最近のあんた、うすつきみ悪いんだよ！まるで…」

八嶋 「…言うな…」

ミーナ 「まるで人間じゃない…」

八嶋 「止める！！」

八嶋、ミーナの頬を張る。

ミーナ 「…馬鹿野郎…」

八嶋 「…」

ミーナ 「馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ！！みんな馬鹿ばかりだ！！」

飛び出して行くミーナ。

ギスケ 「ミーナ！…ごめんあゆみちゃん、あいつ今日カッカしてるから…」

あゆみ 「…」

「本当はあゆみちゃんのこと誰よりも心配してるの、あいつなんだ。…わかってるよね？」  
あゆみ、かすかに頷く。ギスケ、あゆみの頭を撫でる。

ギスケ 「ありがとう…ごめんな。さ、行くぞ渉」

八嶋 「何処に」

ギスケ 「探しにだよ。ホント女心に疎いな。だからもてないんだよお前」

八嶋 「ほっとけ」

ギスケ 「ほれアンタも」

弥生 「なんで私が…」

ギスケ 「こうなったのも半分はアンタのせい。ライターだろ、鋭い嗅覚發揮してくれよ」

弥生 「その代わりやつらの情報、提供してよね」

出て行くギスケと弥生、そして八嶋。その背中にあゆみ。

あゆみ 「ヤシマ！…戻ってくるよね」

八嶋 「…当たり前、だろ…」

去る心人。一人残るあゆみ。無意識にバケツの水を弄ぶ。

翳る晩夏の日差し。夕暮れの様々な物音。やがてドアの開く音。

あゆみ 「ヤシマ!？」

しかし立っていたのは佐都子。

あゆみ 「佐都子さん……」

佐都子 「ごめんね、驚かせちゃった？」

あゆみ 「いえ……」

佐都子 「あの……八嶋君は？」

あゆみ 「出かけて……しばらくは戻らないかもしれません」

佐都子 「そう……あがってもいいかな」

あゆみ 「もちろん。……ここはあたしの家じゃなく……ヤシマの……家ですから」

佐都子 「……」

対峙する二人。気まずい間。あゆみは放心している。

佐都子 「少し見ない間に、また大人っぽくなったねあゆみちゃん……」

あゆみ 「……そうですか」

佐都子 「うん見違えるように。外に出ると男の人、寄ってくるでしょう」

あゆみ 「外、出ませんから」

佐都子 「そう……」

あゆみ 「……ごめんなさい」

佐都子 「え?え何が？」

あゆみ 「切れちゃった……麦茶……」

佐都子 「……」

あゆみ 「さっき、大勢来たから……」

佐都子 「あ、おかまいなく。何でもいいから、そのバケツの水でも……」



あゆみ 「バケツ？」

佐都子 「そうバケツの」

あゆみ・佐都子 「水…」

あゆみ、放心したまま水を弄ぶ。ぴちやり。ぴちや。その水滴の音がだんだん重なって行く。あの水槽の部屋の音に。気泡の音、モーター音、そして胎児の呼吸音に。愕然とする佐都子。

佐都子 「あなた…」

あゆみ 「ワタシ？」

佐都子 「あなたは、誰…」

あゆみ 「ワタシハ、ダレ？」

あゆみ、佐都子と目を合わせる。

あゆみ 「ワタシハ、ダレ？ココニイルノハ、ナゼ…」

佐都子の、声にならない悲鳴。部屋を飛び出して行く佐都子。

無心に水遊びするあゆみ。その口から、唄が聞こえてくる。

それは子守唄。ヤシマがあゆみに唄ってくれたあの子守唄…。しかしそこに彼はいない。

ゆっくり現れる鳩。鳩、目隠しをしている。背後からあゆみを抱きしめる。音楽何時の間にかワグナーに。

鳩、目隠しを取り、あゆみの顔を見つめようとしたその時。

弥生 「相変わらず好きね、ワグナー」

音楽切れる。同時にあゆみ、駆け去る。

「…」

「ヒトラーが好んだ独裁者の旋律。…あなたにぴったりだわ」

「…どうやってここまで入った」

「何年教団を追いかけると思ってるの。下手な信者よか、詳しいわよ私」

「成る程。だったら知っているだろう、私の瞑想を破ったものにどんな罰が下されるか」

「下手な信者よか詳しいけど、生憎と信者ではないのよね私」

「もつともだ…ならば出て行け！今すぐこの場から！！」

「…」

「…ここはお前の来る場所ではない」

「…教団内部がずいぶん騒がしいわ。方舟の中、あっちこっち人だらけ。みんな奇妙な昂揚感に包まれて…まるでお祭りの前みた

い」

「…」

「そして猫たちが消えた。アパートにも方舟にもいない。残っているのは彼らのメッセージだけ…『船出する。もうすぐ方舟は、船

出をする』

「…」

「これは、いったいどういうことかしら」

「(うっすらと笑いを浮かべ) 私が答えると思ってるのか」

「真逆」

「…消える。つまみ出される前に」

「…」

「私の最大限の思いやり…無にするな」

「…」

「…彌生に背を向ける。」

「…」

「…弥生、この間、一時帰宅したわ」

「…」

弥生  
「病状は大分安定したけど…相変わらず一日の大半は向こうに行っただまま…」

「…」  
「…私の顔を見るたびに必ず聞くよ。『透は、まだ帰ってこないのかい。どこまで遊びに行っちゃったんだろうねえ』って…」

弥生、鳩にむしゃぶりつく。

弥生  
「帰ってきて！帰ってきてよ！！」

鳩

弥生  
「…もうとつくに、お夕飯の時間だよ…」

鳩  
「…『最後の方舟』に透などという男は存在しない」

弥生

鳩  
「存在しない男に…帰るべき場所はない」

弥生

鳩去る。

立ち尽くす弥生。やがて。

弥生  
「…ただいま！今日の夕飯なに？えーカレー？給食カレーうどんだったのに…あ、だめチャンネル回しちゃ！ベストテンに聖子ちゃん出るんだから！駄目、駄目だつてば！あーもう…大嫌い！お兄ちゃんなんか、大っ嫌いだ！！」

走りこんでくるミーナ。

ミーナ  
「放つといてよ！どうやって生きていこうがアタシの勝手でしょ！自分の体を自分で使うんだ、誰にも迷惑をかけちゃいけないよ…」

行けば。行きたきや行けば。止める？誰が？…自惚れんのもいい加減にしろ！」

佐都子。

佐都子

「すみません、4限の東洋美術史、確か取ってましたよね？あのう、先週のノート、貸していただきたいんです。バイト、どうしても休めなくて。…ありがとうございます、コピー取ったらすぐ返します。（ノートを見ながら）…八嶋、渉…八嶋さんですね、助かりましたありがとうございます！」

シズエ

シズエ 「嫌だね、御免だねあの家に帰るのは。どうせまたあることないこと、言いふらすんだろう。…早いね、もうお帰りかい。…そうだ、いっこ教えといてやろう。お前の前世は蛙で玲子さんは蛇…頭から食われっちまわないよう、せいぜい用心するんだね！」

牝猫

牝猫 「はいそうなんです、お家賃が払えなくて…でも大丈夫です、私がなんとかしますから。…鳩、あなたはそんなこと気にしないでいいんです。あなたの使命は人々に道を伝えること。…じゃバイト、行ってきます。あ、そうだその前に…メリークリスマス！…下手ですけど、一生懸命編みました…」

佇む5人の女たち。その輪の中に、あゆみの手を引いた女がやって来る。

あゆみ、座り込み、眠り始める。ラジオの音。それは幕開けの場面と同じ。  
5人、両手をゆっくりと空へ。

5人

「私は乾いている。私の中に、もう、海は無い」

ミーナ、弥生、シズエ、佐都子去る。ややあって女も去る。

残るあゆみと牝猫。牝猫、あゆみを見つめている。

牝猫、恐る恐るあゆみに近づく。

牝猫

「…あゆみさん…眠っているんですか、あゆみさん…」

あゆみ、ゆつくり顔を上げる。だがその目にもう光は無い。

牝猫 「具合でも悪いのですか？」

あゆみ 「…」

牝猫 「あゆみさん？」

あゆみ 「ア、アユミ…ダレ？」

愕然とする牝猫。

牝猫 「ど、どうしたんです！？しっかりしてください！」

あゆみ、ただ無表情に牝猫を見つめるだけ。

牝猫 「あゆみさん、あゆみさん！…メシア！」

そこへ。

牝猫 「足元にお気を付けてください」

鳩 「気にするな…見えている」

牝猫と目隠しをした鳩が現れる。

牝猫 「鳩…」

鳩 「苦勞でしたね」

牝猫 「しばらくは帰ってこないな」

牝猫 「(頷いて) 最近ほとんど家に寄り付きません。大抵は深夜に、泥酔して…」

鳩 「それは結構」

鳩、あゆみに近づいていく。

牝猫「鳩！どうも様子が…」

鳩「…静かに」

牝猫「ですが」

鳩「邪魔をするなど、言っています」

牝猫「…」

鳩、あゆみのそばに座り、ひれ伏す。

鳩「長い長い間、お待ちしておりました…」

鳩、目隠しを取り去り、あゆみをその目で見、その腕で抱く。

鳩「会いたかった…ノア」

あゆみ「ノア？」

鳩「あなたはお忘れかもしれない…けれども遥かな昔、私達は二人で、世界を救ったのですよ」

あゆみ「スクウ…セカイヲ…」

鳩「そして再び私達は生まれてきた…もう一度世界を救うために。新たなる千年を迎えるために…」

あゆみ「…アナタ、ダレ…」

鳩「私はあなたの眼…」

あゆみ「…」

鳩「空高く羽ばたいて、あなたの歩む道を見通す眼…」

あゆみ「…」

鳩、あゆみの手を取る。

鳩 「さあ、参りましょう」

あゆみ 「ドコへ？」

鳩 「あなたの、帰るべき場所へ」

あゆみ 「カエルベキ、バシヨ…」

鳩 「(頷いて) この部屋に、あなたの居場所は無い」

あゆみ 「…」

ふらふらと立ちあがるあゆみ。手を貸す鳩。  
そこに。

ギスケ 「ほれ着いたぞ！」

八嶋 「たあらいまあ！」

酔いつぶれた八嶋を担いで、ギスケ現れる。  
二人、中の人々を見てギョツとする。

ギスケ 「あゆみちゃん！」

八嶋 「なんだお前ら…」

鳩 「…この方は、我々がお連れします」

八嶋 「はあ？」

鳩 「この方を本来在るべき場所に戻します」

ギスケ 「な、何言ってる！あゆみちゃんの家はここだ、なあ渉！」

八嶋 「…」

ギスケ 「渉！！」

八嶋 「あ、ああ」

鳩 「そこをどいてください。できれば…手荒な真似はしたくない」

ギスケ 「お前こそ、あゆみちゃんを離せ！」

鳩 「どきなさい」

ギスケ 「涉、警察だ！」

八嶋 「……」

ギスケ 「涉！」

八嶋、弾かれたように飛び出そうとする。

鳩 「牡猫」

牡猫 持っていたスタンガンを八嶋に当てる。倒れる八嶋。

あゆみ 「ヤシマ……」

ギスケ 「涉！！てめえ……」

牡猫、向かってきたギスケにもスタンガンを当てる。ギスケも倒れる。

牡猫 「まずいことになりましたね」

鳩 「障害は覚悟の上です」

牡猫 「この二人、どうしますか」

鳩 「殺しましょう」

牡猫 「え！？」

鳩 「殺しましょう。顔を見られてしまった」

牡猫 「そうですね」

牡猫 「し、しかしそれは……」

「バケツの水で濡れさせなさい。その後風呂に水を張り入れておけば、泥酔して濡れ死んだと思われるでしょう」

牡猫 「それは良い考えです」



牝猫、八嶋を抱え上げる。

あゆみ

牝猫

「ヤシマ…」  
「鳩！メシアはこの男性に良くなつていました！」

鳩

「それが？」

牝猫

「この男性も方舟に連れて行けば、メシアも落ち着き、方舟に慣れるのもたやすいかと思えます！」

鳩

「…わかりました。彼は一緒に連れて行きましょう」

牝猫

「こつちの男はどうします？」

鳩、冷たい目で見つめる。

牝猫、頷き、ギスケを抱え上げバケツに頭を突っ込ませる。

牝猫

「鳩！！」

鳩

「時に犠牲も必要…」

牝猫

「…」

鳩

「…世界を救うためには…」

牝猫

「…」

ギスケ、苦しみ始める。無理やり押さえつける牝猫。目を覚ます八嶋。

八嶋

「…ギスケ…ギスケ！！」

牝猫、再びスタンガンを八嶋に当てる。

八嶋、倒れるが気は失わない。

八嶋 「止める…止めてくれ…止めてくれ!!」

あゆみ、**三**嶋の手から離れる。  
バケツの傍に行き、ギスケの体に手をかける。

**三**嶋 「待ちなさい」

あゆみ 「クルシイノ…ギスケサン…」

**三**嶋 「ノア、何を…」

あゆみ 「イマ、タスケテアゲルネ…」

音楽! 光!

それはあの蟬を救った時と同じ。

ギスケの姿が消え、魚のゆるやかに水をかく音。

絶叫する**三**牡猫。

八嶋 「…あゆみ…」

**三**嶋 「今、何をした…何をしたのだ、ノア!」

あゆみ、にっこりと笑いながら。

あゆみ 「ギスケサン、サカナニカエテアゲタ」

**三**嶋 「魚に…変える…?」

あゆみ 「(頷いて) ミズノナカデモ、モウ、クルシクナイヨ…」

あゆみ、**三**嶋に近づこうとする。

**三**嶋 「寄るなサタン!」

あゆみ 「サタン？」

鳩 「邪悪なる者、封印されし悪魔…何故お前が、ここに…」

あゆみ 「ココニ、イル…」

鳩 「何と云うこと…何と云うことだ！」

牝猫 「鳩！しっかりと云うて下さい！鳩！」

鳩 「海と陸を繋ぐ者が…こんなおぞましい…力を…」

あゆみ 「…」

鳩 「…そうまでして…あなたは…神よ…！！」

牝猫 「鳩！」

鳩 「お待ちください、鳩！」

鳩、よろけながら去る。後を追ひ、猫二人も去る。  
あゆみと八嶋。バケツの中からは水音が聞こえる。

八嶋 「…隠れてるんだろ、出てこいよギスケ…」

あゆみ 「…」

八嶋 「もう、奴ら、行っちゃまったぜ…」

あゆみ 「…」

八嶋、震えながらバケツの中を覗き込む。

八嶋 「…嘘だろ…嘘だろう！！」

あゆみ 「ヤシマ…」

八嶋 「…戻してくれ」

あゆみ 「…」

八嶋 「ギスケを人間に戻してくれよ！出来るだろうお前なら！なあ、頼むよ、頼む…お願いだ…この通り…」  
あゆみ 「モウモドラナイ…」

八嶋

「…」

あゆみ

「ギスケサン、コノママズット…ミズノナカ」

八嶋

「…ギスケえ…」

バケツの上に突っ伏す八嶋。

あゆみ

「ゴメンネ…ヤシマ」

八嶋

「…」

あゆみ

「アタシマタ、ヤシマヲカナシマセタ…」

八嶋

「…」

あゆみ

「…モウニドトカナシマセナイト…チカッタノニ…」

あゆみ、ゆらゆらと立ちあがる。

あゆみ

「カエル…」

八嶋

「…」

あゆみ

「ウミニ、カエルネ…」

あゆみ、ラジオを手に取り。

あゆみ

「…レイディオ…レイディオ」

あゆみ、去る。

入れ違いにやってくるシズエとミーナ。

ミーナ

「大変よ！今、大家が来て…」

シズエ

「このアパート、取り壊すって言うんだよ、しかも来月中に…」

ミーナ 「?どしたの?」  
八嶋 「::ギスケが::」  
ミーナ 「ギスケ?一緒じゃなかったの」  
八嶋 「(首を振り) ::ここに::」

シズエの顔色がさっと変わる。

シズエ 「なんだって?」  
ミーナ 「(覗き込み) あらゝかわいいお魚。これがどしたのさ」  
八嶋 「::ギスケなんだ」  
ミーナ 「は?」  
八嶋 「ギスケ、なんだ::」  
シズエ 「::」  
ミーナ 「酔っ払ってるの?この魚がギスケのわけないじゃん」  
八嶋 「::『最後の方舟』に殺されかけて::あゆみが、変えた::」  
ミーナ 「何言ってるのよ」  
八嶋 「変えたんだ、ギスケを魚に!::俺は、この目で見た::」  
シズエ 「::」  
ミーナ 「::八嶋::」  
八嶋 「::信じてくれ::本当だ::」  
ミーナ 「ど、どうしようシズエさん、八嶋がおかしい::」

シズエ、八嶋の肩に手を置いて。

シズエ 「::あの子は、自分に出来ることをしただけ::」  
八嶋 「::」  
シズエ 「そうしてギスケは生きている::悲しむことなぞ何も無い::」

八嶋

「…」

ミーナ 「シズエさんまで…どうしちゃったのよ、もう」

シズエ 「…八嶋の言っていることは、本当だよミーナさん」

ミーナ 「だって…」

シズエ 「あたしも前に見た…溺れかけている蟬を、あの子が魚に変えるのを」

ミーナ 「そんな…そんな、じゃあ…このちっこい魚がギスケだっていうの!？」

うなづくシズエ。

ミーナ 「嘘よ、嘘嘘!みんなしてアタシをからかっているんでしょ!?ね?」

ミーナ、八嶋の顔を覗き込む。目をそらす八嶋。

ミーナ 「ギスケ!聞こえてるんでしょ、出てきなさいよ!悪ふざけはもうおしまい、いい加減にしないと怒るわよ!ギスケ!ギスケ!…ギスケ!!」

探し回るミーナ。

ミーナ 「能無しなんて言わないから朝帰りしてもいいから他の女と遊んでも許すからへソクリネコババしても怒らないからお願いだよ出てきてギスケ!!」

ミーナ、くずおれる。

ミーナ 「…一人にしないで…アタシを一人にしないでギスケ…」

嗚咽するミーナ。

一際大きく水音。魚のはねる音。

ミーナ 「ギスケ…あんたなの…？」

ミーナ、這って行ってバケツを覗き込む。  
再び大きな水音。ミーナ恐る恐るバケツに手を入れて。

ミーナ 「…せつかくヒトになれたのに、また魚に逆戻り…あんたらしいや…」

バケツに突つ伏すミーナ。

シズエ 「…。あの子はどうしたんだい」

八嶋 「飛び出して行った…海に…」

シズエ 「海に？」

八嶋 「…帰ると言って…」

シズエ 「…止めなかったのかい」

八嶋 「…」

シズエ 「…どうして」

八嶋 「…わからない」

シズエ 「…」

八嶋 「…わからない、俺にも…」

シズエ 「…」

うなだれる八嶋。シズエ、アパートの古い柱を撫でながら静かに。

シズエ 「…とうとう取り壊すんだってさ、このアパート。築40年っていうから、それもしようがないやね。いつかこの日が来ると思っていたけど…それでも、やっぱり…」

八嶋 「…」

シズエ 「…あんだ、このアパートに越してきて何年になるかい」

八嶋 「…」

シズエ 「あたしは、もう4年になるよ。でもね実は…30年ほど前に、一度住んでいたんだ、このアパートに」

顔を上げる八嶋。

シズエ 「結婚してすぐさ…その当時は柱も壁もびかびかで…ああ、こんな素敵のうちで新しい生活が始められるんだって、そりゃあ誇らしかったのを覚えているよ」

八嶋 「…」

シズエ 「そのうちに息子が生まれて…生活は苦しかったけど、楽しかったねえ。親子三人、この狭い部屋で…笑い声やら泣き声、おもちゃや食器の触れ合う音…いろんな音が響いて、賑やかなもんさ」

八嶋 「…」

シズエ 「アパートを出たのは、息子が小学生の時さ。さすがに手狭になってねえ。それからマンションだの戸建てだの、いろんな家に住んだけど、あたしにはこのアパートが一番…一番だったよ…」

八嶋 「…」

シズエ 「それから30年、すっかりこのアパートのことなんか忘れていたのに…家を飛び出して当ても無くさ迷っているうちに、いつのまにかアパートの前に立っていたんだよ。あの時は驚いたねえ、自分でも」

八嶋 「…」

シズエ 「ボロボロになって今にも倒れそうだけど、アパートはちゃんとそこに在った。その時、ようやく悟ったんだよ。あたしの帰る家はここだ、もう、ここしかないんだってね…」

八嶋 「…」

シズエ 「…帰れる家があるんなら、帰ったほうがいい。そしてそこに自分を待っている人がいるなら…これ以上何を望むっていうんだい…」

ゆっくり立ち上がる八嶋。

八嶋 「ありがとう…シズエさん」

シズエ 「探しに行くんだね」



八嶋 「(頷いて) 水族館へ行ってみる。あゆみはこの部屋とあの水族館しか知らない。行くとしたらきつとあそこだ」

シズエ、頷く。

八嶋 「会って確かめるよ。本当に海に帰るのかそれとも…また俺達と暮らしたいのか…」

シズエ

「…」

八嶋 「全てはあゆみの気持ち次第だ…」

シズエ

「お前さんはどうなんだい？」

八嶋

「俺？」

八嶋、一つ笑って。

八嶋

「そんなの、決まってるじゃないか…」

出て行きかける八嶋の背中に。

ミーナ

「…ありがとうって、言っというて」

八嶋

「…」

ミーナ

「ギスケを助けてくれて、ありがとうって…」

八嶋

「…うん」

走り去る八嶋。ややあつてシズエ、ミーナの肩に手をかける。  
ミーナ、バケツを抱えふらふらと立ちあがる。

シズエ

「大丈夫かい？」

ミーナ

「(頷いて) 部屋に戻るわ。(こゝは暑過ぎる…)」

シズエ

「…」

ミーナ 「このままじゃゆだつちやうよ、コイツ」  
シズエ 「…」

ミーナ 「ねえシズエさん」

シズエ 「なんだい」

ミーナ 「アタシ、今までたつくさん男と暮らしてきたけどさあ」

ミーナ、微かに微笑む。

ミーナ 「…コイツが一番手のかかる男になりそうよ…」

静かに頷くシズエ。二人去る。

この空間、転。

別の空間に佐都子。デスクワークをしている。

と、かすかにラジオの音。

佐都子、手を止め怪訝な顔をして立ちあがり、隣の部屋へ行く。

胎児の部屋。水槽の前に、「台の古いラジオ。それは八嶋のラジオ。

佐都子 「何これ…どうしてこんなものがここに…」

佐都子、ラジオを止め、調べる。

佐都子 「涉ちゃんのだ…変ね…」

そこへ。

榊原 「だからこれ以上は駄目だって！」

八嶋 「お願いします、そこを何とか」

榊原 「規則なの。無理なものは無理なの」

八嶋 「ちよっと調べるだけですから」

佐都子 「どうしたんですか」

榊原 「三村さん。いやね、八嶋君が突然やってきて、その、飼育室を見せると」

佐都子 「飼育室を？」

八嶋 「勤務中にごめん。あゆみが…いなくなったんだ」

佐都子 「え…」

八嶋 「あの子、一度も外に出たことがないから、いるとしたらこの水族館のどこかだと思う」

佐都子 「…」

八嶋 「ここ以外の場所は、全部調べた。ちらつとでいいんだ。あゆみがいるかどうかだけ、確かめさせてくれ」

榊原 「あのね八嶋君…」

佐都子 「駄目です」

八嶋 「サトちゃん…」

佐都子 「飼育室は関係者以外立ち入り禁止です。知らないわけではないでしょう」

八嶋 「しかし…」

佐都子 「それに私はついさっき入ったけど、あゆみちゃんの姿なんてどこにも…」

佐都子の顔色が変わる。

佐都子 「…八嶋君。いつも持ってた古いラジオ、あれ…」

八嶋 「あゆみが持って出て行った。それが？」

佐都子 「…なんでもありません。とにかく」

榊原 「出てって出てって！」

八嶋 「三村さん、何か知ってるの？」

佐都子 「…」

八嶋 「そうだろ、中で何か見たんだろう？ねえ三村さん」

佐都子 「いいえ」

八嶋 「教えてくれよ、何があつた？」  
榊原 「しつこいな、君も！いい加減にしないと…」  
三嶋 「失礼」

ぎよつとする心人。いつのまにか背後に三嶋が立っていた。

八嶋 「お前…」

佐都子 「誰、ですか」

三嶋 「飼育室に私を入れなさい」

榊原 「はあ？」

三嶋 「聞こえませんでしたか？飼育室に、私を入れなさいと言ったのです」

榊原 「あ、あんたいきなり何を…」

三嶋 「誤解しないでください。私は頼んでいるのではない…」

三嶋、銃を構える。息を呑む榊原。

三嶋 「…命令しているのです…」

三嶋、三嶋、三嶋、銃を構えたまま侵入する。

三嶋 「静かに。言うことをきけば危害は加えません」

榊原 「な、な、な、な…」

佐都子 「なにが目的ですか」

三嶋 「地上に復活したサタンを無に帰します…」

佐都子 「サタン？」

三嶋 「隠しても無駄だ。隣にいるのはわかっている」

榊原 「何言ってるんだあんた。隣で飼育されてるのは、鯨の胎児だよ」

佐都子 「榊原さん」

榊原 「構うもんか。ほら、先月雲見海岸で保護されただろう、あの鯨さ」

鳩 「…」

榊原 「サタンでも何でも無い。わかつたらさつさと…」

鳩 「では何故、そうまでして隠すのです」

榊原 「え？」

鳩 「マスコミへの非公開、強固な情報統制…そうまでしてあなた方が隠し通そうとしているもの…それは一体、何なのです？」

榊原 「いや、だから…」

佐都子 「関係無いでしょう、あなた達には！さあ、さつさと出て行って！出て行かないのなら警察を呼ぶわよ！」

鳩 「…ふたつ、言っておくことがあります。一つ。我々はこの水族館の全ての出入り口を塞ぎました。つまり館内に残っている客は全

員人質ということ…」

佐都子 「なんですって…」

鳩 「そして二つ目…今、仲間が館内のあちこちに爆弾を仕掛けています…小さいけれど強力な爆弾を…起爆装置は、私が持っています。

言うことを聞かなければどんなことが起こるか…これでわかったでしょう？」

佐都子 「…」

鳩 「鍵を、開けなさい」

榊原 「三村さん…」

鳩 「さあ早く…」

佐都子、飼育室に続くドアを開ける。

あふれ出る音と光。

立ちすくむ人々。

八嶋 「これは…」

牝猫 「一体なんだこれは！！」

佐都子 「…ご覧の通り、鯨の胎児です」

牝猫 「し、しかしこの鯨には…」

八嶋 「エラがある…」

鳩 「…」

榊原 「ああそうさ、その通りさ！この鯨はな、母親の腹ん中で仮死状態だったところを発見されたんだ。それだけなら珍しい話じゃない。

だがこいつは…羊水の中でエラ呼吸をしていたんだ！まるで魚のように…信じられるか？哺乳類である鯨にエラだぞ！？発表すればどんな騒ぎになると思う。だから俺達は…」

鳩 「水族館の奥深く隠した…」

榊原 「時期が来れば発表するつもりでいたさ！いくらなんでも永遠には隠せない」

鳩 「面白い…実に面白い」

榊原 「…」

鳩 「10億年の進化の旅を、逆に辿ろうと言うのか…昔、我々の遠い祖先が捨てた海に、お前はもう一度帰ろうと…」

佐都子 「…」

鳩 「我々は失敗だったということか…」

鳩、静かに笑う。

八嶋 「…生きているのか」

佐都子 「生きてるわ。もうずっと…眠ったままだけど」

八嶋、水槽に近づいていく。足が、ラジオに当たる。

八嶋 「…俺のラジオ…」

佐都子 「…」

八嶋 「あゆみが来たのか、この部屋に！？」

佐都子 「いいえ。私はずっと隣の部屋に居たけど…」

八嶋 「じゃあ何故このラジオがここに…」

佐都子 「それは…」

鳩 「決まっているだろう…」

八嶋 「え……」

八嶋 「まだ見ないふりをするつもりか……？」

八嶋 「……」

八嶋、八嶋に向けて銃を撃つ。衝撃で倒れる八嶋。

佐都子 「涉ちゃん！」

八嶋 「……大丈夫……当たってない……」

その時、鯨が咆哮する。くぐもった叫びを上げ。

牡猫 「う、動いた！」

牝猫 「眼が、眼が開く！」

水のうねり、動く音。

そして鯨は歌い始める。

あの子守唄を。

八嶋が、あゆみに唄って聞かせた、懐かしいあの子守唄を……

八嶋 「……あゆみ……」

呆然とする八嶋。

八嶋 「お前なのか、あゆみ……！」

水槽にすがりつく八嶋。

榊原 「なんだこの唄!？」

佐都子 「…おはよう、あゆみちゃん…とうとう、起きてしまったのねえ…」

鳩 「…」

佐都子 「このまま、眠っていられたら、どんなにか…」

鳩、青い粉末の入った小壘を榊原に手渡す。

鳩 「水槽に入れなさい」

榊原 「これは？」

鳩 「シアン化カリウム…青酸カリです」

八嶋 「何だって!？」

鳩 「彼女は生まれてきてはならない存在だった…だから帰すのです。彼女のやって来た虚無の彼方に」

佐都子 「どうして…」

鳩 「簡単なことです。我々と彼女は共生できない…海と陸が分かれているように、ね」

八嶋 「そんなことはない、あゆみは俺達と一緒に暮らして行ける!あゆみはあゆみだ、どんな能力があってもどんな姿をしていても、それは変わらない…決して」

鳩 「本当にそう思うのですか？」

八嶋 「…ああ」

鳩 「彼女が…我々を駆逐するために生まれてきたと知っても？」

八嶋 「…あんた、あゆみと会ったことあるだろう」

鳩 「…」

八嶋 「だったら、どうしてそんな馬鹿げたことが言えるんだ…」

鳩 「…入れなさい」

榊原、頷く。八嶋、榊原に向かって行く。

牡猫 「動くな!」



≡牡猫≡、銃で威嚇する。

≡鳩≡ 「さあ……」

≡神原≡ 「あ、ああ……」

動き出す神原。すかさず佐都子、体当たりをして小塚を奪い八嶋に投げる。

佐都子 「八嶋君！」

≡牡猫≡ 「くそっ！」

≡牡猫≡、銃を撃つ。佐都子、腕を抑えて悲鳴を上げる。

八嶋 「サトちゃん！」

駆け寄る八嶋。その二人に狙いを定める≡鳩≡。

≡鳩≡ 「塚を渡しなさい」

八嶋 「……」

≡鳩≡ 「今度は、外さない……」

八嶋 「……」

≡鳩≡、引き金を絞ったその刹那。

手にナイフを持ち走りこんで来た弥生、≡鳩≡を刺す。 ≡牡猫≡の悲鳴。

≡鳩≡ 「……お前……」

弥生 「もう止めよう、こんなことは……」

鳩「……」

弥生「……涙を流すのは疲れたよ、お兄ちゃん……」

鳩「……」

牡猫「畜生……」

牡猫、弥生を殴り倒し、銃を向ける。

鳩「止せ！……もういい」

牡猫「しかし」

鳩、牡猫に支えられて立つ。

鳩「……覚悟は出来ているね」

牡猫「はい」

鳩、水槽を振り仰ぎ。

鳩「一緒に行ってもらいますよ……地獄の果てまでも」

鳩、起爆装置を押す。爆発音、地鳴り。倒れる人々。鳴り渡るサイレン。

八嶋「お前、何を……」

鳩「座して滅びを待つよりも、我々は自ら死を選ぶ……」

八嶋「まさか……」

佐都子「集団自殺!？」

榊原「馬鹿なことを……」

鳩「馬鹿なこと、か……」

八嶋

「…」

鳩

「いずれ世界は水に沈む…メシアを失った今、我々に残された道はもう…」

八嶋

「メシアなんていない！」

鳩

「…」

八嶋

「初めからメシアなんていないんだ。いるのは人間だけ。俺やあゆみやあんたと同じ、生身の人間だけだ」

鳩

「…」

八嶋

「…水が来るなら来るでいいじゃないか…きっと生きていく方法はあるよ…」

鳩

「…それが君の道か」

八嶋、頷く。

鳩

「…わかっているな。長く、険しい道だぞ…」

鳩の体、大きく揺れる。駆け寄る弥生。

弥生

「お兄ちゃん…お兄ちゃん!!」

鳩

「…夕飯には間に合いそうにないな…弥生…」

微かに微笑み、鳩、息絶える。

弥生

「…ありがとう…弥生って、呼んでくれて…」

その亡骸に突っ伏す弥生。

牝猫、立ち上がり自分の胸に銃を突き付ける。

八嶋

「撃つな！」

牝猫、引き金を引く。銃声。倒れる牝猫。

佐都子 「しっかりして！」

牝猫 「…手を…」

八嶋 「え？」

牝猫 「…鳩…」

弥生、牝猫の手を鳩の手に重ねる。薄く微笑む牝猫。

牝猫 「…良かった…まだあなたの後姿が見える…」

八嶋 「死ぬな！死なないでくれ…」

牝猫、息絶える。放心状態の牝猫。

榊原 「駄目だ、廊下まで炎が…」

佐都子 「消火装置は!？」

榊原 「湯水で水なんかねえよ！」

佐都子 「八嶋君、何を…」

八嶋 「あゆみを助ける！このままじゃ…」

榊原 「馬鹿かお前！鯨どころか俺達だつて…」

八嶋 「あゆみを残してはいけない！」

再び爆発音。地鳴り。立ちこめる煙。咳き込む榊原。

佐都子 「苦しいよ…涉ちゃん…」

八嶋 「しっかりしろ佐都子!…畜生…畜生！」

八嶋、水槽の中のあゆみを見上げる。

八嶋

「…ごめんよ…お前を迎えに来たのに…こんなことになっちまった…。でもきつともうすぐ助けが来る…それまで、お前だけでも生き抜くんだ…。この水槽の中で…母さんの子宮と同じ、静かで暖かな海の中で…いいな、あゆみ…」

ますます強くなる炎と煙。

八嶋

「そうだ、これだけは言っておかなくちゃ…ミーナがありがとうってさ…ギスケを助けてくれて、ありがとうって…。ありがとう…さよなら」

八嶋、崩れ落ちる。その時。

あゆみ

「ヤシマ…」

八嶋

「あゆみ！お前どうして…」

あゆみ

「大丈夫。今、助ける」

八嶋

「え…」

あゆみ、微笑む。

あゆみ

「水なら、いっぱいあるじゃない…」

八嶋

「止せ、あゆみ！」

水槽の割れる音。あふれる水。急速に鎮まっていく熱と炎。  
あゆみ、ゆっくりと崩れ、八嶋の腕の中に。

八嶋

「水を！誰か水をくれ！」

あゆみ

「…ヤシマ。あたし、海に帰ろうとしたの」

八嶋 「水だ…水を…」

あゆみ 「でも帰れなかった…あたしはやっぱりこの世界が好き…みんながいる、この世界が好き…」

八嶋 「…」

あゆみ 「…あたし、ここにいてもいいかな…」

八嶋 「当たり前だ！あゆみは…俺の大切な…大切な…」

あゆみ 「…よかった…」

八嶋 「あゆみ！行くなあゆみ！」

あゆみ、震える手を八嶋に伸ばす。

あゆみ

八嶋 「ヤシマ、あたし最後に気付いたの…」

あゆみ 「あゆみ…」

あゆみ、花のように微笑んで。

あゆみ

八嶋 「海は、あなたの中にある…あたしは、あなたの海に帰るよ…」

あゆみ 「あゆみ！！」

あゆみ、逝く。

八嶋、絞り出すように。

八嶋 「…水をくれ…」

同時に、土砂降りの雨。世界の生まれ変わる、その始まりの雨。  
ラジオ、静かに天気予報を流す。

ニューヨーク、雨。サンフランシスコ、雨。メキシコシティ、雨。リオデジャネイロ、雨。シドニー、雨。ジャカルタ、雨。シンガ  
ポール、雨。ハノイ、雨。北京、雨。モスクワ、雨。ロンドン、雨。パリ、雨。ベルリン、雨…

静かに、人々は消えて行く。  
転。

土砂降りの雨の中、工事の音がする。  
傘をさしたシズエとミーナ、立っている。ミーナ、小さな水槽を下げている。  
遅れて八嶋と佐都子。佐都子は腕を包帯で吊っている。

八嶋 「すまない、遅れて」

ミーナ 「おつそいよ」

佐都子 「もう、あらかた済んじやいました？」

シズエ 「ああ。あとは柱を残すだけ……」

八嶋 「ミーナ、それ……」

ミーナ 「ん？」

ミーナ、水槽を上げて見せる。

ミーナ 「こいつも、見ておきたいだろうと思つてさ。日吉荘の最後」

八嶋 「うん……」

工事の音、大きく。見上げる人。

八嶋 「……あつけないなあ……」

ミーナ 「あつけないねえ」

佐都子 「ついこの間まで住んでいたのに」

シズエ 「今はもう瓦礫の山……」

ミーナ 「いろいろ、ありましたな」

シズエ 「いろいろ、ありました」

佐都子 「夢を見てみたい…」

八嶋 「夢、じゃない」

佐都子 「…」

八嶋 「夢、なんかじゃないんだ…」

佐都子 「…そうね」

ミーナ 「ああ、最後の「本」…3」

シズエ 「2」

八嶋 「1」

一際大きな音。やがて静寂。雨の音のみ響き渡る。

シズエ 「さてと。アタシんち近いから、お茶でも飲んでいくかい」

ミーナ 「アタシパス。引越しの片づけがまだ全然済んでないんだ」

八嶋 「俺らも、このあと病院に行かなきゃいけないって」

ミーナ 「怪我？まだ痛むの？」

八嶋 「いや、そっちじゃなくて…」

ミーナ 「？」

八嶋 「(照れくさそうに) 子ども、出来たんだ。まだ1ヶ月だけど」

ミーナ 「やったじゃん！おめでどう」

佐都子 「ありがとう」

ミーナと佐都子のしゃべる横で、佐都子のおなかをみつめているシズエ。

八嶋 「なにか見える？シズエさん」

シズエ 「…あの子の前世はたぶん…」

シズエ、八嶋を見上げてにっこりと笑う。八嶋も笑い返す。



八嶋 「俺も、そう思うよ…」

ミーナ 「じゃあここで」

佐都子 「さようなら。また会いましょうね」

シズエ 「いつかまた…」

八嶋 「それまで元気で…」

ミーナ、シズエ、去る。

佐都子 「さ、私達も行きましょうか」

八嶋 「ああ」

佐都子、歩き出す。八嶋、去りかねて立ち止まる。

そこに傘をさした女が通りかかる。八嶋と女の傘がぶつかる。

八嶋 「失礼」

女 「いいえ」

二人の目が合う。

女 「…このまま」

八嶋 「え？」

女 「このまま、雨が降り止まなかったとしたら…あなたは、どうしますか」

八嶋 「あの一体…」

女 「…どうしますか？」

八嶋、女の間を見つめ。

八嶋 「船を、作ります」

女 「船…」

八嶋 「乗った誰もが幸せで、心から笑いあえるような、大きくて丈夫でそして暖かい船…」

女 「…」

八嶋 「そんな船を、作ります…」

女、微かに微笑んで。

女 「…期待していますよ…」

女、静かに去る。

佐都子の声 「涉ちゃん、早く！」

八嶋 「ああ」

八嶋、佐都子の方へ歩いていく。

人々の息遣いが聞こえた懐かしい場所に、  
ただ雨だけが絶え間無く降り続き、

ここに、

幕は、  
降りる。

2000年4月30日 中澤日菜子

この物語はエノデンと共に。

